

新 詳

内容解説資料

日探 046-901 『新詳日本史探究』

「教科書発行者行動規範」に則った資料です

# 日本史探究

近世 冒頭部分

試し読み・ポイント解説

本資料は、帝国書院『新詳日本史探究』のうち、  
近世冒頭部分にあたる p.138 ~ 174 を、  
ポイント解説付きでご覧いただける冊子です。

 帝国書院

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-29

TEL 03-3262-4795 (代)

URL <https://www.teikokushoin.co.jp/>

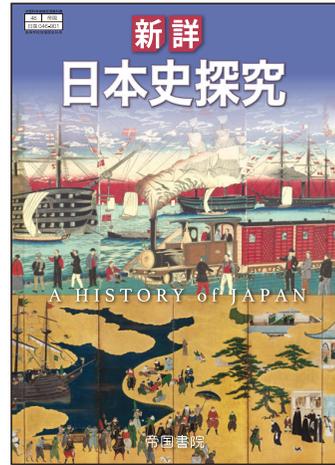
※本資料に掲載している内容は一部  
変更になる可能性があります

# 新詳日本史探究

大学入試対策も万全！

歴史の流れと背景をとらえ、  
探究する力を育てる教科書

令和9 (2027) 年度発刊 / 日探046-901 / B5判 / 400ページ



## 本書の特色

### 特色

1

世界の動きを背景に、日本史の学びが広がる教科書

- 世界の視点から見ることで、日本の歴史がわかる本文記述
- 日本と世界の相互関係をとらえる「世界の中の日本」

### 特色

2

因果関係を丁寧に記した理解しやすい教科書

- 社会的な背景を丁寧に記した本文記述
- 歴史研究の成果も踏まえ、流れが理解できる本文記述

### 特色

3

日本史を多面的・多角的にとらえられる教科書

- さまざまな視点から日本史を描く本文記述と「深める」
- 日本各地の歴史に焦点を当てる「地域の歩み」
- 日本史の通説をとらえ直す「歴史再考！」
- 文化と社会背景を結びつける「文化から見る当時の社会」

### 特色

4

紙面の三段構成と多数の資料で分かりやすく使いやすい教科書

- 日本史のポイントがつかみやすい要約文・本文・側注の三段構成
- 広い紙面を生かした多数の掲載資料と、資料読解に取り組める工夫
- 歴史事象を空間的にとらえられる帝国書院ならではの地図

### 特色

5

探究活動に丁寧に取り組める教科書

- 部全体で探究活動に取り組める構造
- 中学校の歴史や歴史総合を踏まえて部の学習に臨める「時代の扉」
- 資料を通して思考力・判断力・表現力を養う「探究TRY」
- 部全体の学習を振り返り、時代の特色をまとめる「まとめと展望」

- 本冊子では近世の冒頭となる3部1章・2章・3章1節をまとめて掲載し、解説を加えています。教科書全体における位置は、以下のもくじをご覧ください。
- 「本書の構成」にある通り、本教科書は探究活動に取り組みやすい構成を意識しておりますので、本冊子にてご確認ください。

▼p.2-3

もくじ	
東アジアと日本の交流の歴史	巻頭1
はじめて	巻頭3
歴史総合の振り返り	1
もくじ	2
コラム・特設・QRコンテンツ	4
<b>1部 先史・古代の日本と東アジア</b>	
時代の扉	6
1章 先史時代の社会の形成	6
1項 日本列島への人類の進出	8
2項 豊かな狩猟採集社会の形成	10
3項 農耕社会の成立と小国家の形成	14
2章 歴史資料と先史・古代の展望	20
探究TRY① 遺跡の分布や遺物から時代区分について考える	20
探究TRY② 古資料と文献資料から東アジアとのつながりについて考える	22
探究TRY③ 日記や文書から当時の人々の考えや暮らしについて考える	24
3章 古代社会の形成と変容	26
1項 律令国家の形成と古墳	26
2項 飛鳥の朝廷	32
3項 律令国家の形成と白鳳文化	36
4項 平安京と律令国家の展開	44
2項 律令国家の転換と貴族文化	44
1項 平安遷都と貴族文化	54
2項 摂関政治の展開と社会の変容	59
3項 院政文化	64
2部 まとめと展望	64
<b>2部 中世の日本と世界</b>	
時代の扉	72
1章 中世社会への転換	72
1項 院政の成立と荘園の拡大	74
2項 武士の政治的成長と平氏政権	78
3項 院政の文化	82
2章 歴史資料と中世の展望	84
探究TRY① 中世寺色紙から東アジアの交流を考える	84
探究TRY② 絵巻から土地の権利について考える	86
<b>3部 近世の日本と世界</b>	
時代の扉	138
1章 近世社会への転換	140
1項 東アジアの変動と南蛮貿易	140
2項 信長・秀吉による統一政策の推進	143
3項 全国統一と近世社会への変化	147
4項 桃山文化	150
2章 歴史資料と近世の展望	154
探究TRY① 江戸城から幕府と大名の関係を考える	154
探究TRY② 琉球王国から近世の対外関係を考える	156
探究TRY③ 女性の旅日記から近世の社会を考える	158
3章 近世社会の展開と変容	160
1項 幕藩体制の確立	160
2項 近世日本の対外関係	165
3項 身分制と人々の暮らし	171
<b>4部 近現代の地域・日本と世界</b>	
時代の扉	210
1章 近現代社会への転換	212
1項 日本の開港と経済の混乱	212
2項 江戸幕府の滅亡	218
3項 新たな政治体制の発足	221
2章 歴史資料と近現代の展望	224
探究TRY① アズマドリから近現代日本の様子について考える	224
探究TRY② アズマドリから近現代日本の様子について考える	226
ひびから近現代日本の発展を考える	228
3章 近現代社会の展開と変容	230
1項 新政府による国づくり	230
2項 制度の刷新と産業革命	234
3項 「文明開化」の社会と人々	239
4項 主要な政治事件と展開	242
2項 立憲政治の成立と日清戦争	244
1項 立憲政治の成立と日清戦争	244
2項 日清戦争と日露戦争	247
3項 日清戦争と日露戦争	254
4項 資本主義の発展と日露戦争	260
1項 日本の産業革命と資本主義	260
2項 日露戦争と帝国主義の日本	266
3項 日露戦争後の国内展開	271
4項 明治時代の文化	274
4部 近現代の日本	278
1項 第一次世界大戦と日本	282
2項 政治的展開と大衆化	282
3項 新しい国際秩序と日本	292
4項 第二次世界大戦と日本	298
1項 政治的展開と大衆化	298
2項 日中戦争と戦時体制	302
3項 第二次世界大戦の展開	307
時代の扉	318
6項 占領と民主化への道	320
7項 経済大躍進への道	328
1項 占領と民主化への道	320
2項 冷戦と日本の経済復興	328
3項 国際社会への復帰	334
4項 高度経済成長期の日本	340
5項 世界経済の変化と日本の台頭	350
6項 アジア諸国の発展と日本	358

### 3部 近世の日本と世界

時代の扉	138
1章 近世社会への転換	140
1項 東アジアの変動と南蛮貿易	140
2項 信長・秀吉による統一政策の推進	143
3項 全国統一と近世社会への変化	147
4項 桃山文化	150
2章 歴史資料と近世の展望	154
探究TRY① 江戸城から幕府と大名の関係を考える	154
探究TRY② 琉球王国から近世の対外関係を考える	156
探究TRY③ 女性の旅日記から近世の社会を考える	158
3章 近世社会の展開と変容	160
1節 幕藩体制の確立	160
1項 幕藩体制の形成	160
2項 近世日本の対外関係	165
3項 身分制と人々の暮らし	171

### ●本書の構成

この教科書は、時代ごとの4部構成になっています。1章では、時代の転換に着目して時代の特色について考察し、そこから「探究する問い」を表現します。2章「探究TRY」では、1章で表現した「探究する問い」を踏まえて、自身の興味・関心に関連するさまざまな資料を活用して、その時代の特色について自身の仮説を表現します。3章では、「探究する問い」と自身が表現した仮説に基づいて学習の課題(問い)を設定し、「探究する問い」と自身の仮説について答えます。4部4章では、教科書の学習を踏まえて、自身のテーマを設定して、資料を活用して探究し、自身の考えを表現します。

本書の特色は、弊社ウェブサイトにて詳しく解説しております。右の二次元コードからご覧ください。



### 東アジアの世界の動きから近世の学習を概観しよう

近世の初め、アジアに進出したヨーロッパ勢力が日本とも結びつき、南蛮貿易が始まった。有力大名であった信長や秀吉は、異国の技術や文化を取り入れつつ諸勢力との戦いに勝利し、天下統一を成し遂げた。

続いて政権を握った徳川家康が江戸幕府を開くと、政権の基盤を固めるなかで禁教政策や貿易統制の強化を進めるようになり、中世後期に開かれた貿易や交流は縮小していった。一方で、中国・朝鮮・琉球王国・アイヌ民族といった東アジアや、ヨーロッパ勢力で唯一貿易を続けたオランダとの交流は続いた。

統一政権の下で国内情勢が安定すると、貨幣経済が発展し、産業や文化が成熟していった。その一方で、たび重なる天災や飢饉は幕府の財政を圧迫し、18世紀末になると欧米諸国のアジア進出への対応を迫られたことで、新たな政治体制のあり方が模索されていった。

3部1章では、戦国大名が割拠するなかで織豊政権が統一を推し進める、中世から近世の国家・社会の変容を学習する。この過程を通して、自身が近世の時代の特色をどのように考えるかの「探究する問い」を表現する。

3部2章では、江戸城築城や琉球王国と日本の交流、女性のお伊勢参りなどの近世の時代の特色を表す具体的な事例を通して、近世の自身の仮説を表現する。

3部3章では、幕藩体制や幕府の経済・外交政策の下で近世社会が成熟し、近代化の基盤が形成されていく過程を通して、近世の社会や文化の特色を考察していく。

#### 17世紀ごろの東アジア



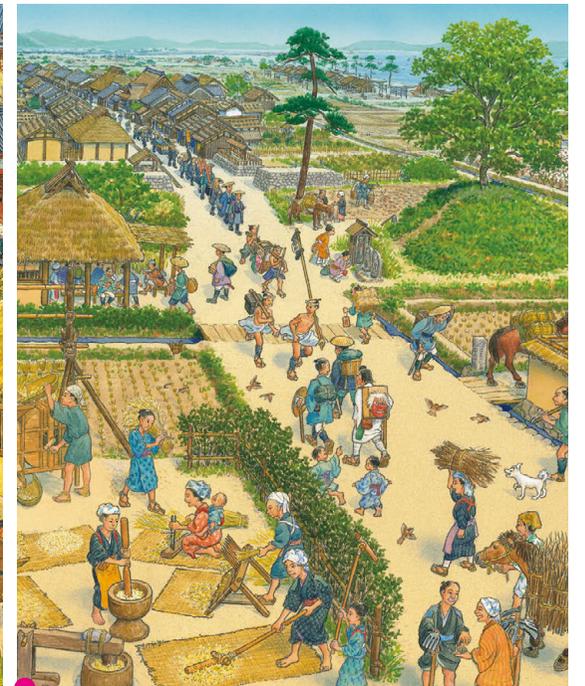
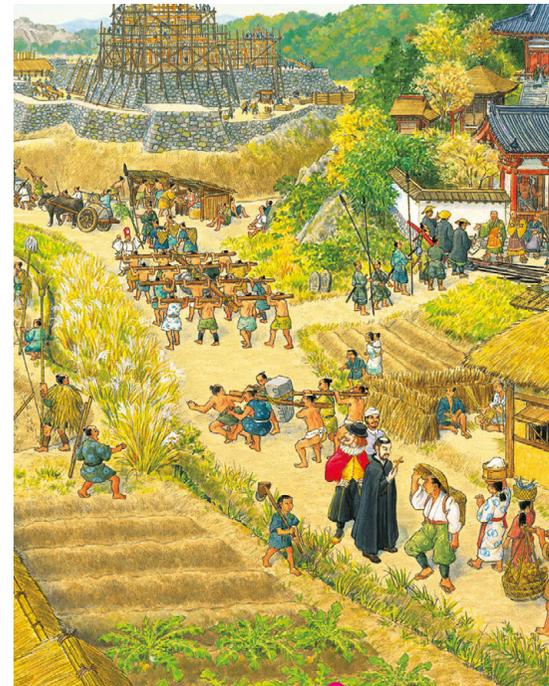
### 時代の特色を考えてみよう

時代像イラスト



① 各時代像イラストは、どのような様子を描いているだろうか。

② 各時代像イラストから時代の特徴を表している箇所を3つ挙げて、その理由を説明しよう。



↑2 安土桃山時代の人々の様子

↑3 江戸時代の人々の様子

中学校で学んだ歴史の内容が示されたイラストにより、既習事項を踏まえて学習に臨めます。【特色⑤】

動き	東アジア・世界との交流	日本の主な出来事	時代
1542/43 鉄砲が伝わる 49 キリスト教が伝わる ○ 倭寇の活動が活発になる(後期倭寇) ○ 日本で銀の輸出が盛んに	1560 桶狭間の戦い		室町 戦国
1557 明、ホルトガル人のマカオ居住を許可する ○ 華僑が増大する 70? 明、海禁政策を緩和する ○ 明、一条鞭法を全国で実施	82 天正遣欧少年使節派遣 87 パテレン追放令 92~93 文禄の役 97~98 慶長の役 ○ 朱印船貿易が栄える	73 織田信長、室町幕府を滅ぼす 82 羽柴秀吉、太閤検地を始める 85 秀吉、関白に就任(桃山) 88 刀狩令 90 秀吉、全国統一を果たす	安土桃山
1600 英、東インド会社設立 02 蘭、東インド会社設立	1607 朝鮮の使節が来日 09 己酉約条 釜山に倭館を設置 13 慶長遣欧使節派遣 35 日本人の海外渡航・帰国を禁止 ○ 欧州船の来航を制限	1600 関ヶ原の戦い 03 徳川家康、征夷大将軍に就任 12 幕府直轄領に禁教令 15 大坂夏の陣(豊臣氏の滅亡) 武家諸法度制定(寛永) 35 参勤交代を制度化 37~38 島原・天草一揆 85 生類憐みの令(元禄)	江戸
16 ヌルハチ、後金を建国 31~45 李自成の乱 36 後金、国号を清に改称	1715 海舶互市新例 78 ロシア船、根室に来航 92 ラクスマン、根室に来航	1716~45 享保の改革 32 享保の飢饉 67~86 田沼時代(宝暦・天明) 82~87 天明の飢饉	江戸
44 明の滅亡 清、北京に遷都 99 清、広州で英と貿易開始 1717 地丁銀制が開始	57 清、欧州船の入港を広州に限定 ○ 清の全盛期 96~1804 白蓮教徒の乱	98 近藤重蔵・最上徳内ら、蝦夷地を調査 1808 間宮林蔵、樺太を調査(化政) 33~36 天保の飢饉 37 大塩平八郎の乱 39 蛮社の獄 41~43 天保の改革	江戸
1840~42 アヘン戦争 42 南京条約	1804 レザノフ、長崎に来航 08 フェートン号事件 25 異国船打払令 37 モリソン号事件 42 天保の薪水給与令		江戸

# 1章 近世社会への転換

章の問い なぜこの時期が、中世社会から近世社会へ時代が移る時期とされているのだろうか。

用語解説  
一問一答など



↑1 16世紀末の日本図 ポルトガル人のイエズス会宣教師ティセラの情報に基づき、オランダの地図制作者オルテリウスが発行した地図。鉱山が記載されている。

## 史料 イエズス会宣教師が記した日本の風土(17世紀初頭)

日本の国土には多くの鉱山があって、あらゆる種類の金属を産出する。…主要なものは全土にある銀山であって、中国の石見の国、北の海にある佐渡島、その他多くの地にある金山というのがそれである。…

〈ジョン=ロドリゲス著  
土井忠生・浜口乃二雄ら訳『日本教会史』

疑問 なぜ宣教師は、地図に鉱山を記したり、本国に日本の鉱山の情報を伝えたりしたのだろうか。

## 1項 東アジアの変動と南蛮貿易

項の課題 東アジアの変動や南蛮貿易により、日本の社会はどのように変化したのだろうか。

日本銀交易が日本国内にもたらした影響がわかります。 特色①

溶かすと、銀と鉛の塊ができ、さらにそれを熱していくと鉛が先に溶けて、銀だけが残るといった二段階の過程からなる製錬法。灰吹法導入以前の中世日本には、銀抽出を行う技術がなかった。

### Key Word キリスト教 QR

イエスを救世主とする一神教で、世界三大宗教の一つ。ユダヤ教を母体として1世紀に中東で始まり、4世紀末にローマ帝国が国教として、以後ヨーロッパを中心に世界宗教となった。

カトリックと東方教会に分かれていたが、16世紀にカトリック世界では宗教改革が起こり、プロテスタントが分かれた。カトリックは西洋で劣勢となったため、イエズス会などの修道会が世界各地への布教を進めた。

## 日本銀と16世紀後半の東アジア海域の変化

明の経済が発展するなかで、後期倭寇らが活躍し、東アジアの貿易が活性化した。日本からは大量の銀が輸出された。

16世紀半ば、日本は世界屈指の銀産出・輸出国となり、輸出された銀の多くは、経済が発展し、銀の需要が高まった中国へと向かった。

この時期には、明への朝貢関係を中心とした交易や外交のしくみが動揺していた。海禁政策を続ける明では、国内の経済発展や北方で対峙する遊牧民との戦費調達のため、銀の需要が高まった。また、アジアやヨーロッパでは、中国産の絹製品や陶磁器、生糸の需要が高まった。そのため後期倭寇が、東アジアや東南アジア各所で、明の物品と海外の銀とを交換する密貿易を盛んに行った。明は、沿岸部で密貿易や海賊を働く後期倭寇の取り締まりに苦慮し、1570年ごろに海禁を緩めた。しかし、日本との貿易は制限されたままで、倭寇やアジアに進出したポルトガルなどが日本と明の貿易を担った。

そして同時期に日本では、石見銀山をはじめ鉱山が相次いで開発され、銀を鉱石から抽出する技術(灰吹法)が朝鮮より導入された。こうして膨大な量の日本銀が産出され、それらが中国に向かった。日本へは、当時国内生産がほとんどない生糸や木綿などが持ち込まれた。木綿は、戦国時代の日本において、兵士の服として需要が大きかった。鉱山開発は膨大な人と資金を必要とし、それを調達できた戦国大名が力をつけていった。



## 鉄砲・キリスト教の伝来による日本の変化

東アジア既存の貿易ネットワークに参入したヨーロッパ勢力は、戦国時代の日本に鉄砲とキリスト教をもたらし、大きな影響を与えた。

ヨーロッパの勢力で、初めにアジア海域に現れたのは、ポルトガルであった。彼らはアジアへと進出範囲を広げ、明のマカオを拠点として東アジアの貿易に参加した。16世紀後半には、スペインも現れ、フィリピンを植民地として貿易に参加した。両国は、互いに支配領域を定めつつ、カトリックの布教と貿易を一体として世界に進出していった。そして、倭寇らによって構築された貿易ネットワークを利用し、日本にまで来航した。ポルトガル・スペインと、日本の人々との間で行われた貿易を、南蛮貿易とよぶ。彼らがもたらした鉄砲とキリスト教は、日本社会の様相を大きく変えることとなった。

鉄砲は、1543(天文12)年に倭寇の船に同乗して種子島に至ったポルトガル人がもたらした。種子島の領主は鉄砲を買い上げ、家臣に複製技術を学ばせた。鉄砲は強力な兵器として急速に普及し、日本列島各地で製造されるようになった。そして戦闘方法や築城技術も、鉄砲に適するように変化していった。一方、鉄砲を撃つために必要な火薬は、原料となる硝石が国内で手に入らないため、貿易に関わることや輸入された硝石を買いつける資金力が、戦国大名にとって重要となっていた。

キリスト教は、1549年、イエズス会宣教師フランシスコ=ザビエルが倭寇の船に同乗して鹿児島に来航したことから伝わった。ザビエルは山口の大内氏や豊後府内の大友氏に布教を許可された。ザビエルの後、相次いで宣教師が来日した。キリスト教は、日本の宗教に限界を感じていたさまざまな人々に受け入れられ、西日本を中心に広まっていった。キリスト教の布教は貿易と一体化していたことから、大名のなかには、南蛮貿易を行うために積極的に布教を支援し、みずから洗礼を受けるものも現れた(キリシタン大名)。さらには、直接ローマ教皇へ使節を派遣する者もいた(天正遣欧使節)。

↑2 「南蛮屏風」 外国船や、宣教師、東南アジアから連れてこられた虎などが描かれている。右上の建物はキリスト教の教会で、「南蛮寺」とよばれた。(図説部分 神戸市立博物館蔵)

② 南蛮 西洋人たちは東南アジア方面からやってきたので、南蛮人とよばれた(→p.6)。

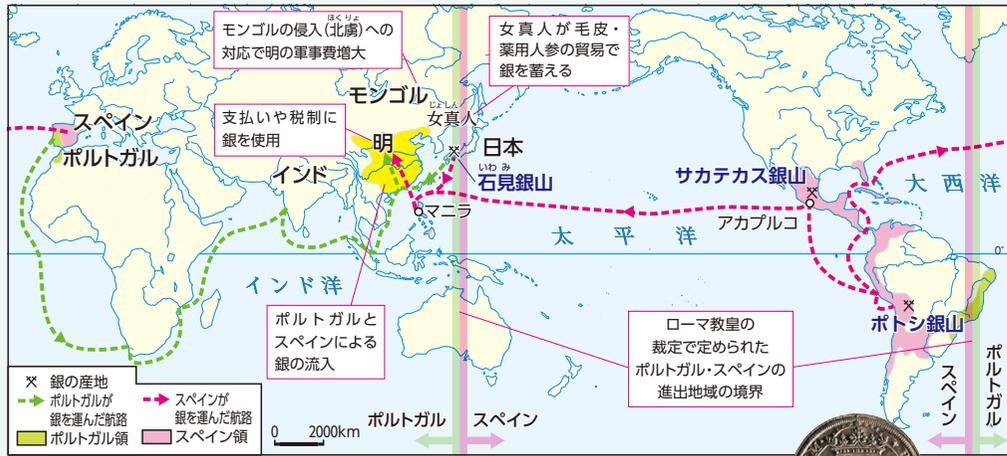
鉄砲の普及により、日本国内がどのように変化していったのかがわかります。 特色①

④ イエズス会 世界各地への布教を目的とした修道会の一つで、ザビエルも結成メンバーの一人。ポルトガルが支援しており、スペインが支援するほかの修道会と、日本布教では対立した。

⑤ コレジオとセミナリヨ 聖職者養成のための学校としてセミナリヨや、さらに上級のコレジオも置かれた。

⑥ 天正遣欧使節 宣教師が主体となり、日本での布教にさらなる援助を依頼するため、九州の有力なキリシタン大名の一族である伊東マンショ・千々和ミゲル・中浦ジュリアン・原マルチノを派遣した。

1項の振り返り  
学習内容を踏まえ、p.140の1項の課題に答えよう。



### 16世紀の銀の動き



日本で作られた銀  
(島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

## 世界の銀で結びつく16世紀の世界

### 16世紀以前の銀流通とその再活性化

銀は、金と並んで古代よりユーラシア大陸の国際通貨であった。モンゴル帝国の時代、ユーラシア大陸の商業ネットワークが整備され銀の需要が高まり、元では銀が不足したため紙幣が発行されていた。しかし元が弱体化すると、銀の需要も下火になった。その後16世紀になり、中国の明王朝の産業や商業が発達すると、再び銀の流通が活発になり、そこに日本産銀が大きな役割を果たすことになった。

### 銀を求める明と日本からの銀

明は農耕を基本として、元に対抗した経済政策をとり、当初は物々交換を推進し、経済が発展すると銅銭や紙幣を発行した。その一方、人々は非公式通貨として銀を信用し、銀の需要が高まった。

16世紀半ばになると日本で銀山が開発され、精錬の技術も高まったため、膨大な日本の銀が後期倭寇や朝鮮半島などを經由して明に持ち込まれるようになった。日本では中国からの銅銭の輸入が衰えるなか、戦国大名は新たな通貨である銀を求めて競って鉱山を開発した。これにより、西日本を中心に、アジアの銀の流通網に組み込まれていった。

やがて明は北方遊牧民と倭寇(北虜南倭)対策で戦費を必要として、銅銭の発行を抑えつつ税金を銀に一本化し始め(一条鞭法)、1580年ごろ中国全土に広げた。そのため、より一層銀の需要が中国国内で高まり、生糸や絹織物をはじめ中国の物産が輸出され、銀が中国に流入した。17世紀初頭、世界の銀の3分の1が明に流入していたと推定されている。

銀の流通には、中国東北部の女真人なども関わっていた。女真人が16世紀末に経済力をつけたことは、後の明清交替へとつながっていった。

### アジア・中国を目指すヨーロッパ諸国

15世紀末から、アジア方面にはポルトガルが、南北アメリカ方面にはスペインが香辛料を求め進出した。両国はローマ教皇の裁定で、世界を二分して進出地域を定めており(デマルカシオン)、日本はその境界線上にあるため、両国の対立もみられた。この時期カトリック勢力は、宗教改革により西洋で劣勢となっており、さまざまな修道会を先頭に新たな布教の地を海外に求めた。出先ではポルトガルとスペインが、経済的にカトリック布教を支援した。

西洋では、14世紀以降のルネサンス期における学問の発展を経て、科学的知見に基づき火薬や鉄砲などの武器が開発されていた。ヨーロッパ商人はこれをアジアにもたらし、代わりに西洋で生産が未熟な、景德鎮のような陶磁器や、生糸などを入手した。

### 流入するメキシコ銀

明の銀需要が高まるなか、1570年代以後、スペインは中南米のポトシ銀山などから産出した銀を、メキシコから太平洋を經由してアジアに持ち込み、さらに中国に銀が集まった。一方17世紀、アジアへは遅れて進出したオランダやイギリスは、すでに安定的に西洋にもたらされるようになった香辛料ではあまり利益を出せないことから、日本の銀を手に入れアジア内の貿易の決済に利用した。このようなアジアの経済的優位は17世紀を通して続いた。

日本史の背景として、ヨーロッパ諸国が東アジアに進出した経緯がわかります。 **特色①**



1 長篠合戦(部分) 両軍に鉄砲がみられる。織田・徳川連合軍は、この合戦に1000挺以上の鉄砲を用意したという。(徳川美術館蔵)

## 2項 信長・秀吉による統一政策の推進

### 項の課題

織田信長、豊臣秀吉の統一政策により、日本の社会はどのように変化したのだろうか。

### 織田信長の台頭

争乱の時代から、まず織田信長が台頭する。信長は、室町幕府の後継者争いを受け、足利義昭を奉じて15代将軍とし、さらに周辺の勢力と戦って、支配地を拡大した。

16世紀後半には、全国に群雄割拠する戦国大名たちの軍事力や経済力が向上し、広い地域を統一する者も登場した。そのなかで特に力を伸ばし、勢力を広げたのが、尾張の織田信長であった。

信長は、分裂していた尾張を統一した後、1560(永禄3)年に駿河などを治める今川義元の侵攻を退け(桶狭間の戦い)、三河の松平元康(後の徳川家康)と同盟を結んだ。67年には、美濃の斎藤氏を滅ぼして岐阜城を本拠とし、「天下布武」の印を使用するようになった。

そのころ京都では、13代将軍足利義輝が家臣に殺害され、後継者争いが起こっていた。信長は、義輝の弟である足利義昭の援助要請に応え、1568年に入京し、義昭を15代将軍とした。信長は将軍の権威を背景に、東海から畿内という経済が発展した地域を押さえ、越前の朝倉氏・近江の浅井氏、比叡山延暦寺、石山本願寺とその地方拠点である伊勢長島・越前の一向一揆などと戦い、勢力を拡大した。その後、義昭が将軍として権力の掌握を目指したため対立し、1573(天正元年)年、義昭を京都から追放した。これにより、室町幕府は事実上滅亡した。

### 信長の経済政策

信長の勢力拡大の背景には強大な軍事力・経済力があつた。信長は、流通の中心となる都市を押さえ、流通ルートを整備して貿易や商業を奨励した。

信長の強大な軍事力の背景には、畿内を中心とする高い経済力があつた。信長は、経済の中心となる都市を直轄地化し、関所の撤廃、道路の整備、水運の掌握、悪銭と良銭の交換レートを定める撰銭令の発令により流通・交易を促進した。特に堺は明・南蛮との貿易港であり、鉄砲・火薬などの物資の調達地として重要視された。また信長は、支配地域に



3 天下布武の印 印文は、天下に武を布くはるるの意。

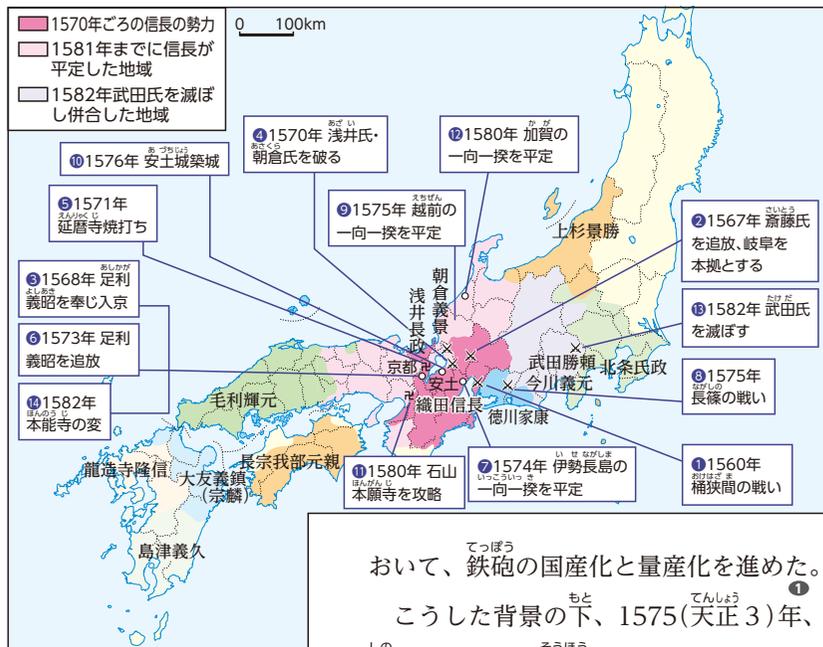
織田信長が勢力を拡大できた背景が、導入の「疑問」と対応する本文からわかります。 **特色④**

1 「安土桃山」と「織豊」 織田信長と、続く豊臣秀吉が中心となった時代は、両者の本拠地から「安土桃山時代」とよばれる。また、両者の頭文字から「織豊期」とよぶこともある。

2 義輝の後継者争い 13代将軍の義輝の死後、義輝のいとこの義栄と、義輝の弟の義昭が争っていた。義栄は1568年に14代将軍となったが、信長の進軍により劣勢になるなか死亡した。

3 信長の撰銭令 従来の撰銭令では、過度な悪銭の使用は禁止されたが、信長はそれらの使用も多少価値が落ちるとはいえ公認し、銭貨不足を補おうとした。しかし、不足状況は続いた。

縄文
B.C
A.D
1 弥生
2
3
4 古墳
飛鳥
奈良
9
10 平安
11
12
13 鎌倉
14 南北朝
15 室町
16 戦国
17 安土桃山
18 江戸
19 明治
20 大正
21 昭和
平成
令和



↑1 織田信長の勢力範囲

① 日本における鉄砲生産地  
鉄砲の生産は、伝来から比較的短期間で全国に伝わった。特に近江の国友、紀伊の根来・雑賀、信長が振興した和泉の堺などが有名である。

② 信長の楽市・楽座令  
織田信長が、安土城の城下町に出した楽市・楽座令は、従来の自由な商業活動を促進する内容に加えて、売買や人の往来、商人・職人を安土に集中させ、城下町を繁栄させる狙いがあった。

年	主な出来事
1582	本能寺の変 山崎の戦い 太閤検地(～98)
86	四国平定 九州へ停戦を命令 太政大臣となる
87	九州平定 パテレン追放令 聚楽第完成
88	後陽成天皇が聚楽第行幸 刀狩令 海賊取締令
90	小田原攻め 奥州平定
92	全国統一の達成 人掃令
97	朝鮮出兵(文祿の役、～93)
98	朝鮮出兵(慶長の役、～98)
98	没(62歳)→朝鮮出兵終了

↑2 豊臣秀吉関連年表

豊臣秀吉が関白や太政大臣への就任を目指した理由を記述しています。 特色②

世界の 中の日本 宣教師が見た堺

1560年代、堺にはガスパル・ヴィレラやルイス・フロイスらキリスト教の宣教師たちが滞在した。彼らの記録には、堺は広く、人口が多く、大商人が多数いる自由で豊かな都市で、ヴェニス(ヴェネツィア)のように自治が行われていると記されている。また町の周囲には堀が廻らされて防衛が堅く、堺のなかでは敵どうしも礼儀を尽くすという。

において、鉄砲の国産化と量産化を進めた。

こうした背景の下、1575(天正3)年、甲斐の武田勝頼と対峙した長篠の戦いでは、双方が鉄砲を活用するなか、信長が鉄砲・火薬の製造・調達力で勝り、武田軍を圧倒した。翌76年には、琵琶湖を介した国内交通の要衝に豪壮な安土城を築かせ、安土を本拠地とした。

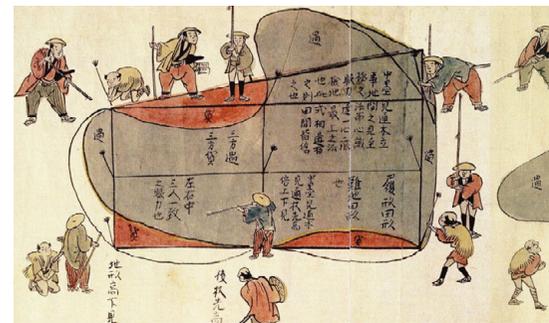
信長は、岐阜・安土など本拠地とした城下に楽市・楽座令などで優遇を与え、城下町の振興を図った。一方分国には、ほかの戦国大名同様に指出検地を行い、貫高に応じて軍役を賦課した。また、南蛮貿易の興隆のために、ルイス・フロイスなどキリスト教宣教師を保護した。輸出品である銀を生産するため、但馬生野銀山の掌握・開発も行われた。

豊臣秀吉の全国統一

織田信長の後、その家臣だった羽柴秀吉は、織田家中の主導権争いに勝ち、関白豊臣秀吉として全国を統一した。秀吉はばく大な直轄地と鉱山を経済基盤とした。

1582(天正10)年、信長は、甲斐の武田氏を滅ぼして東国へも勢力を拡大するなか、京都で家臣の明智光秀に討たれた(本能寺の変)。当時、信長の家臣たちは各地に出陣していたが、羽柴秀吉が直ちに兵を戻し、山崎の戦いで光秀を倒した。その後、織田家中で主導権争いが起きた。秀吉は賤ヶ岳の戦いで信長の三男 織田信孝と柴田勝家を倒し、小牧・長久手の戦いでは、信長の次男 織田信雄とそれに連合した徳川家康と対峙し、勢力を拡大して織田家の家臣から脱却した。秀吉は畿内の要となる石山本願寺の跡地に大坂城を築き、大坂を本拠地とした。

秀吉は、全国の武家を支配するため、朝廷の権威を利用して、みずからの権力の正当性を得ようとした。1585年には、秀吉は摂関家以外で初となる関白への就任を遂げ、豊臣の姓を与えられて豊臣秀吉となった。さらに翌86年、秀吉は太政大臣を兼ねて朝廷の最上位となった。88年、秀吉は京都に建てた聚楽第に後陽成天皇と諸大名を招き、天皇の前



↑3 検地の様子(江戸時代) (女福寺蔵)

で諸大名に自身への忠誠を誓わせた。これにより政権の基盤が固まった。

秀吉は天皇の権威の下、大名間の争いに停戦を命じ、それに従わなかった者は武力で制圧した。1587年、九州で薩摩の島津氏を降伏させた。90年には、小田原の北条氏を滅ぼし、この後、伊達政宗ら東北の諸大名も服属させた。これにより、秀吉はおおよそ全国統一を果たした。

秀吉の経済基盤は、ばく大な直轄地(蔵入地)と佐渡・石見・生野など主要な金・銀鉱山からの運上であった。そのほか京都・大坂・堺・長崎などの主要な都市を直轄地とし、各地の豪商を統制下においた。1588年には、天正大判などの貨幣の製造を始めた。

1591年に秀吉は関白を甥の秀次に譲ったが、自身は太閤として権力を握り続けた。その後京都郊外に伏見城を築き、みずからの居所とした。

検地と刀狩による社会の変化

秀吉は太閤検地を行い、全国を統一的に石高で把握し、一地一作人の原則を築いた。また刀狩令・人掃令を出した。これらは近世社会に変化する土台となった。

秀吉は全国に太閤検地を行い、村ごとに検地帳を作成させた。これは従来の指出検地と比べて、実際に現地を測量しようとしたこと、全国で同じ京杓を使って米の収穫高である石高を算出したこと、検地帳に登録された百姓が年貢を負担する一地一作人の原則を定めたことなどが特徴である。これにより、土地に重層的な権利があった荘園制は崩壊した。

そして全国的に、秀吉が領主に、そして領主が家臣に統一基準の石高をもとに知行を与えて軍役を負担させ、百姓には石高に応じて年貢を負担させる石高制が築かれた。従来あいまいだった村の境も明確になった。

また1588(天正16)年、一揆の防止・大仏建立などを理由に、百姓が所持する刀・脇差などの没収を命じた(刀狩令)。村の武力は削がれ、帯刀が農民と武士の身分区別の指標となり、兵農分離が進んだ。91年には朝鮮出兵の軍役のため、武家奉公人が町人・百姓になったり、百姓が耕作を放棄することなどを禁止し、翌92年戸口調査を行った(人掃令)。

諸政策は結果的に、地域ごとに異なる決まりや基準があり、武力を背景とした自力救済が基調であった中世社会からの変化の土台となった。

秀吉の諸政策について、それまでの指出検地と異なる点を記述しています。中世から近世への変化がわかります。 特色②

地域の 歩み 秀吉の京都改造

秀吉は関白就任後、応仁の乱以来荒廃していた京都を、居所の聚楽第を中心とする城下町の形に改造し、権威を示した。京都の周囲を御土居で囲み、町割を短冊状にした。公家や寺院は新たに作った公家町・寺町に移転させ、聚楽第周辺は武家屋敷を置いた。現在の京都の景観はこの町なみが基盤になっている。

③ 天正大判 重量165gの金貨で、中央政権が一定の規格を定めて金貨を鑄造したのはこれが初めてであった。

④ 豊臣秀次 秀吉の甥。秀吉に実子がなかったため、関白を継いだ。秀吉に実子の秀頼が生まれると失脚した。

⑤ 太閤 関白を引退した人物の尊称。

⑥ 桃山 伏見城が築かれた地は、江戸時代に桃の木が植えられ、桃山とよばれた。

Key Word 石高制

田畑や所領の価値を、米の収穫高(石高)に換算して統一的に把握した制度。各田畑はおおよそその米の生産力に応じて4等級に振り分けられ、等級ごとの基準に実測した面積をかけて石高に換算した。近世を通して、軍役や年貢の量は石高を基準に定められた。

**史料】バテレン追放令**

日本八神国たる処、きりしたん国土に候儀、太だ以て然るべからず候事、其国郡の者を近付け、門徒になし、打破るの由、前代未聞に候。…

伴天連・其知恵の法を以て、心ざ那を持ち候と思し召され候へば、右の仏法を相破る事、曲事に候条、伴天連の地二八おかせられ間敷候間、今日に用意仕り帰国すべく候、…

— 自今以後、仏法のさまたげを成せ商人の儀八申すに及ばず、いづれにてもきりしたん国より往還くるしからず候条、其の意を成すべし事、

（伴天連：外国人宣教師、パードレ・神父の当て字）  
（松浦家文書）

**日本の人身売買と海外輸出**

日本では古くから人身売買が行われており、能(→p.128)や御伽草子(→p.130)などにも人身商人が登場する。特に戦国時代の戦乱では、乱取りとよばれる人や物の略奪がしばしばみられ、略奪された人々は人身売買の対象となっていた(→p.119)。

ポルトガル商人により、日本人が海外に売られることもあった。1587年に豊臣秀吉が出したバテレン追放令の背景には、日本人が奴隷として南蛮・中国・朝鮮などに売られていることを、秀吉が問題視したこともあった。

**1 朝鮮出兵の呼称** 秀吉の朝鮮出兵は、朝鮮では干支から「壬辰・丁酉倭乱」、中国では「万曆朝鮮の役」とよばれている。

**2 五大老・五奉行** 五大老とは、徳川家康・前田利家・毛利輝元など、各地の有力大名を指す。一方五奉行は、浅野長政、石田三成、増田長盛など、秀吉の有力な家臣で行政を実行していた者たちを指す。

**2項の振り返り**  
学習内容を踏まえ、p.143の2項の課題に答えよう。

**資料活用** 「バテレン」とそれ以外の外国人への対応は、どのように異なっているのか、読み取ろう。

**1 文禄・慶長の役**  
秀吉は出兵当初、明征服の後には後陽成天皇と関白秀次を北京に移すなど、明・朝鮮・日本の三国にまたがる国割と、自身は日明貿易の拠点だった寧波に隠居所を構え、大竺方面に進出するとの構想を述べている。



**秀吉の対外政策**

秀吉は貿易にも積極的だった。南蛮貿易を奨励し、琉球王国、高山国(台湾)に入貢を求めた。また明の征服のため、朝鮮に二度にわたり出兵した。

秀吉も南蛮貿易を重視し、当初はキリスト教を保護していた。しかし九州平定の帰路、博多でバテレン追放令を出し、宣教師を国外追放とした。これはキリスト教の広がりや、キリシタン大名の大村純忠が宣教師に長崎を割譲していることを問題視したためであった。しかし、秀吉は南蛮貿易を引き続き奨励したため、その後も布教が黙認された。

秀吉はアジア海域の貿易にも積極的で、1588(天正16)年には倭寇などの海賊行為を禁止する海賊取締令を出し、海上交通の安全を確保して貿易促進を図った。一方、琉球王国、高山国(台湾)、ルソンのスペイン政庁などに国書を送って入貢を求めたが、これは進展しなかった。

明については、秀吉は武力で征服する意向を示した。その足がかりとして朝鮮に服属と明への先導を要求したが、拒否されたため、朝鮮へ出兵した。1592(文禄元)年、肥前の名護屋を本陣として、朝鮮に小西行長・加藤清正らの大軍を派遣した(文禄の役)。戦国時代を経た日本軍は戦争技術が高く、朝鮮側の内部対立や油断もあって、朝鮮の都・漢城を落として明の国境に迫った。しかし朝鮮各地での義兵の抵抗や、李舜臣率いる水軍の活躍、明の援軍、兵糧不足により、しだいに戦況は悪化した。やがて行長らと明の間で独自に和平交渉が行われ、明の使節が来日したが、秀吉との交渉は決裂した。1597(慶長2)年、秀吉は再び朝鮮に大軍を送った(慶長の役)。日本軍は序盤から苦戦し、戦争中に秀吉が死去すると、後を担った五大老・五奉行は日本軍を撤退させた。

朝鮮出兵は、朝鮮に大きな犠牲を払わせ、援軍を出した明の衰退も進んだ。日本でも、動員された大名・民衆は軍役の負担により疲弊し、有力大名間の対立が生じ、豊臣政権は揺らぐこととなった。



	西軍 ( )は本拠地	東軍 ( )は本拠地
石田三成	19万4千石(近江 佐和山) →処刑	徳川家康 250万石(武蔵 江戸) →400万石(武蔵 江戸)
毛利輝元	118万8千石(安芸 広島) →29万8千石(長門 萩)	前田利長 83万5千石(加賀 金沢) →119万5千石(加賀 金沢)
宇喜多秀家	47万4千石(備前 岡山) →八丈島へ流刑	福島正則 24万石(尾張 蒲洲) →49万8千石(安芸 広島)

**1 関ヶ原合戦** 関ヶ原での戦いは1日で終わったが、日本各地で東西軍の戦闘が行われた。(彦根城博物館蔵)

**2 関ヶ原の戦い前後で石高の変化の例** 豊臣領も、222万石から65万7千石ほどに減らされた。

**疑問** 関ヶ原の戦いで、大名どうしの関係はどのように変わったのだろうか。

**3項 全国統一と近世社会への変化**

**項の課題** 徳川家康の全国統一により、日本の社会や海外との関係はどのように変化したのだろうか。

**家康の台頭と江戸幕府の成立**

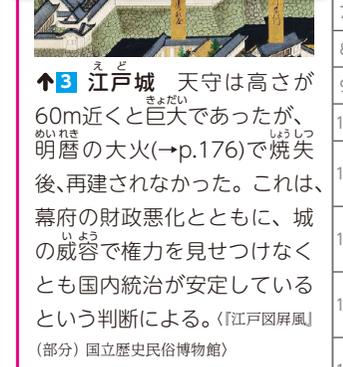
徳川家康によって江戸幕府が開かれた。幕府は、豊臣政権とは異なるしくみを導入することで、長期的な政権へと向かっていった。

豊臣秀吉の死後、有力大名である五大老の合議によって政治が運営されることになったが、大名のなかで関東に250万石もの最大の領地を有する徳川家康が実質的に政治を掌握した。それに対抗する石田三成を中心とする大名たちは、1600(慶長5)年、家康が東国にいる最中に畿内 で兵を挙げ、日本各地に戦争が広がった。同年に美濃で両軍は決戦に及び(関ヶ原の戦い)、家康軍が勝利した。これにより、家康は実質的に武家の頂点に立った。家康は敵対した大名たちの領地を没収または削減し、豊臣家の直轄支配地も減らした。これらは全国の石高の約4割に及び、土地は家康に味方した大名や徳川家の家臣たちに与えられた。

1603年には、家康は朝廷から征夷大將軍に任命された。これにより、家康は、天皇の権威の下、名実ともに武家の頂点に立ち、江戸幕府が開かれた。しかしこの時、大坂には豊臣秀吉の息子である豊臣秀頼がおり、彼が将来天下を治める可能性もあった。そのため家康は、翌04年諸大名に国絵図と郷帳を提出させ、自身が国土の支配者であることを示した。また、1605年には息子の徳川秀忠に將軍職を譲り、徳川家が世襲で天下を治める姿勢を示した。一方で、家康は政治の実権を握り続けた。

家康は、秀頼が有力大名のままにいることから、京都方広寺の鐘銘の文言に言いがかりをつけ、1614年と翌15年の2回にわたって全国の大 名を動員して豊臣家を滅ぼした(大坂冬の陣・夏の陣)。中世以来の、武士どうしが覇権を求めて行う戦争は、これが最後となった。

**江戸幕府の開府当初、家康がどのようにして権力の安定化を図ったのかを記述しています。**



**1 西軍の構成** 石田三成が主導したが、西軍の総大将は毛利輝元が担った。

**2 大御所** 江戸幕府の將軍は、將軍辞任後も大御所として若い將軍を後見し、実質的に外交や重要な政治について決定することもあった。

**3 方広寺鐘銘事件** 豊臣方が建てた方広寺大仏殿の鐘にある、「国家安康」「君臣豊楽」の銘が、家康の文字を分離して家康を呪い、逆に豊臣を立てるものとした。



手伝普請への大名動員や武家官位の制定に、どのような目的があったのかわかります。 **特色②**

↑1 五位以下の大名が将軍に謁見する様子 (『徳川盛世録』(部分) 東京都立中央図書館蔵)

① **武家官位** 将軍が朝廷に武士の官位を推薦し、朝廷も原則そのまま任命するという形式がとられた。朝廷と別の枠組みなので、例えば中納言や山城守といった官位が武士と公家で重複しても問題はなかった。これ以前の秀吉の時期は一本化されていたので、官位が不足していた。

② **朝鮮国交復活への道のり** 東アジアでは戦争時、先に国書を出した側が敗北を認めるという慣行があった。家康は朝鮮に出兵しておらず、朝鮮も侵略された立場であるため、それぞれ先に国書を出す理由はなかった。宗氏は偽の家康の国書を作成し外交の正常化を図った。

**世界の 中の日本** 慶長遣欧使節

1613年、仙台藩主伊達政宗は、家臣の支倉常長らを、太平洋を横断させてメキシコ経由でスペインとローマに派遣した。貿易船誘致と仙台藩領への宣教師招へいが目的だったが欧州で了承を得られず、20年に帰国すると日本では禁教が強まっており、使節は目的を達成できなかった。しかし、使節が持ち帰った品々は貴重で、2013年にユネスコの「世界の記憶」に登録された。

→2 **支倉常長** (1571~1622) (『E3』 仙台市博物館蔵)



**史料** **武家諸法度(元和令)**  
 文武司馬の道、専ら相嗜むべき事、…  
 群飲佚遊、を制すべき事、…  
 法度を背く輩、国々に隠し置くべからざる事、…  
 諸国の居城、修補をなすと雖も、必ず言上すべし。況んや新儀の構営、堅く停止せしむる事、…  
 私に婚姻を締むべからざる事、…  
 (御触書寛保集成)

↑1615年に発布され元和令とよばれる。たびたび改正されつつも(→p.160、176)、近世を通じて武家の基本法となり続けた。

**史料** **毛利家への二国一城令**  
 …貴殿御分国、中、居城をば残し置かれ、其外の城は、ここごとく破却あるべき旨…(毛利家文書)

↑1615年、西日本の国持大名を中心に、老中から個別に下された。

そして同1615年中に、幕府は武士を統制する**一国一城令・武家諸法度**と、朝廷と公家を統制する**禁中並公家諸法度**を相次いで制定し、法による支配体制を固めた。

徳川将軍は、秀吉の時代のような絶え間ない戦争ではなく、日本の平和に益するという名目で、名古屋城・彦根城の築城や安倍川の河川改修などに諸大名を動員した。また、幕府は、朝廷から与えられる官位についても、武士と公家を別の枠組みとし、武士階級内部に将軍が実質的な任命権をもつ官位制度をつくった。このようにして、将軍と諸大名の主従関係や、武士どうしでの上下関係を強化していった。

**家康の外交と貿易**

家康は、朝鮮出兵で断絶していた朝鮮との国交を復活させた。一方ポルトガルとの貿易について主導権を握ろうとしたが、ポルトガルの力は強いままであった。将軍となった徳川家康の対外政策には、朝鮮出兵後の朝鮮・明との講和と、貿易におけるポルトガルの力の抑制という二つの課題があった。

家康は、中世以来朝鮮と貿易していた対馬の宗氏に命じ、講和の可能性を探った。朝鮮側も、北方で活発化した女真人(後の清)に対処するため、日本との関係は安定させたい。宗氏の努力もあり、朝鮮との正式な国交が復活し、朝鮮の使節が1607(慶長12)年来日した。一方幕府は、明とも交渉を試みたが、国家間の外交は樹立できなかった。

ポルトガルは、拠点のマカオと長崎との間に定期航路を確立し、日本が必要な大量の**生糸**や絹織物を安定的にもたらしていた。そのためポルトガル側に価格設定の主導権があり、さらにキリスト教の弾圧も徹底できなかった。家康はこの貿易の主導権を握ろうと、1604年に日本側で生糸の値段を決める**糸割符制度**を導入した。また、海外貿易全体におけるポルトガルの地位を低くするため、オランダとイギリスの東インド会社を誘致し、**平戸**に商館を設置した。さらに、マニラを経由してスペインとの関係も新たに広げ、仙台藩主伊達政宗が欧州へ家臣を派遣するこ



↑3 17世紀初めの東南アジアと朱印船貿易

とも許可した(慶長遣欧使節)。しかし、こうした施策にもかかわらず、貿易において、ポルトガルの占める割合は高いままであった。

**朱印船貿易と禁教令**

日本からも積極的に海外に幕府の許可した船舶が派遣されたが、同時に海外で日本人が紛争に巻き込まれる問題や、国内でのキリスト教禁制が課題となった。

家康は、みづからが支配しやすい貿易体制をつくるため、積極的にタイやベトナム北部など東南アジアの国々との関係強化を図った。家康は、将軍の許可状(朱印状)を持った貿易船をアジア各所へと派遣した(朱印船貿易)。朱印船貿易の担い手には、大商人や西日本の大名、日本に長年住む外国人商人などがおり、生糸や絹織物、薬の原料や鹿革などが輸入された。朱印船の寄港先には日本人商人が住む**日本町**が形成され、平和な日本で仕事のなくなった武士などが永住することもあった。さらに、日本人が現地の政治に関わることや、紛争に巻き込まれることもあり、これが問題化することもあった。

また、九州など西日本を中心に、中国や東南アジアの貿易船が来航し、それぞれ現地の諸大名などと貿易を行った。

キリスト教については、家康は当初、貿易振興のため布教を黙認していた。やがてポルトガル・スペインの侵略の可能性や信徒の団結に脅威を感じ、1612(慶長17)年に**禁教令**を幕府直轄領に発し、翌13年全国に広めた。禁教令では、キリスト教からの改宗を強制し、応じない者は処刑もしくは国外追放とした。しかし、大名ごとに禁教の方法を任せため、徹底度合いは地域で差があり、棄教せず潜伏する者も多々いた。

**世界の 中の日本** 海外に住む日本人

16世紀から17世紀初頭、海外で生活する日本人が多かった。アジアの港湾都市では出身地別に集住するしくみが多くみられ、日本人商人による日本町もその一つだった。例えばアユタヤの日本町には、1000~1500人が生活し、日本式の家屋と共に神社も建てられていたとされる。

日本人傭兵は、戦国時代を経て戦闘能力が高く、オランダがイギリス商館を襲ったアンボイナ事件など、西欧諸国がアジアで衝突する際の戦力となった。シャム(タイ)で傭兵として活躍し国王から官位を与えられた山田長政のように、現地の政治に深く関わる者もいた。

海外の日本人には、奴隷として売られた者(→p.146)や現地で奴隷となった者もいた。後に幕府の貿易統制が進むと、日本から追放されたキリスト教徒や混血児も海外に定着した(→p.165)。

→4 **フェフォの来遠橋** 日本町と、中国人が住む町を結んだ橋。1593年に日本町の住人が建てたとされる。フェフォは現在のホイアン。



**③ 朱印船と明商人との貿易**

明は、倭寇や朝鮮出兵を背景に、中国本土への日本船来航を禁じていた。そのため、朱印船と明の商人とは、東南アジアの各地や台湾で盛んに貿易を行った(出会貿易)。

**④ 幕府の海外情報**

1600年、豊後にオランダ船リーフデ号

**日本人の海外移住の背景や、彼らが各地にもたらした影響を、本文とコラムで記述しています。** **特色①**

スト教にはカトリックとプロテスタントがある(→p.140)と伝えた。そして、プロテスタントであるアダムスらは、カトリックの布教と貿易や海外領土支配は一体化しているが、プロテスタントは布教と貿易・領土支配を分けられるとも伝えた。

**3項の振り返り**

学習内容を踏まえ、p.147の3項の課題に答えよう。

## 戦国大名らを中心につちかわれた桃山文化

戦国時代末期から、安土桃山時代にかけて、天下人や戦国大名らを中心  
彼らが築いた城郭や、それを飾った屏風から、文化が  
文化に関するさまざまな資料を、本文と関連させて掲載したコーナーです。 **特色③**



**↑1** 『唐獅子図屏風』 狩野永徳の障壁画で、金箔の上に絵を描く金碧濃彩の手法がとられた。縦約224cm、横452cmと巨大な画面に、中国の神獣獅子を描いている。城郭内部は、こうした障壁画でいろどられた。失われた安土城の障壁画も永徳が関わったとされる。  
〈国産〉右隻 皇居三の丸尚蔵館蔵

**→2** 二条城二の丸御殿大広間 二条城内の、200畳ほどの大広間である。従来、主君と臣下の対面は少人数で行われていたが、大広間の設置により、上段に座する一人の主君に対して、多くの臣下がひれ伏す儀礼が可能となった。〈元離宮二条城事務所提供〉



**史料** ルイスフロイスが記した織田信長と安土城  
彼は都から十四里の近江の国の安土山という山に、その時代までに日本で建てられたものなかもどつとも壮麗だといわれる七層の城と宮殿を建築した。…連び上げるのに四、五千人を必要とする石も数個あり、…我らヨーロッパの石造建築を眺めるとほとんどなら異なるいほど堅固に、そして豪華にできている。…宮殿や広間の豪華さ、窓の美しさ、内部で光彩を放っている金、赤く漆で塗られた木柱とすべて塗金した他の柱の数々…  
人々が確言するところによれば、彼は…もつとも富み、かつ強大な人物であった。…多量に所有する金銀以外に、…インドの高価な品、シナの珍品、朝鮮および遠隔の地方からの美しい品々は、ほとんどすべて彼の掌中に帰したからである。…茶の湯の道具は、日本では、我らの許における宝石のような価格、価値、貴重さを有し、…すべての美しく珍しい品々、彼はそれらすべてが集まる中心点であった。  
〈松田毅一「川崎桃太郎伝説」フロイス日本史の現代語訳〉



**↑3** 姫路城(白鷺城) 平山城で、簡単に攻められないよう城全体が複雑な構造になっている。天守の高さは31.5m、その下の石垣の高さは14.5mで、崩れないよう、日本独自に発展した数学(和算)で計算されている。



**↑4** 『世界図屏風』 ヨーロッパの地図を参考に日本人が作成したとされる。16世紀末以降、世界地図の屏風は、海外への関心の下、多数作成された。〈国産〉158.7cm×477.7cm 神戸市立博物館蔵

**疑問** 天下人や戦国大名が、金や海外由来の題材で城郭を飾ったのはなぜだろうか。

## 4項 桃山文化

**項の課題** 全国統一が進むなかでの文化には、どのような特色があるのだろうか。

### 豪華絢爛な桃山文化

天下人や大名による経済発展・技術革新や国内外の流通の活発化により、壮大で豪華な文化が築かれた。民衆にも、新しい生活様式や芸能が広く浸透した。

5 戦国乱世を生き抜いた天下人や戦国大名は、戦争で支配領域を拡大するとともに、領国経営や鉱山開発により人・資源・富を集積し、みずからの権力を象徴する城郭・寺社の造営や城下町の整備を進めた。相次ぐ戦争や土木事業を通じ、めざましい技術と文化の革新が起こった。

また豪商たちは、これまでの中国やアジア諸国に加えて、新たに來航したヨーロッパ人との貿易によって巨万の富を得た。彼らがもたらした文物や新しい技術や地球的世界観は、国際的な文化を生み出した。

さらに、村が自立し、京都・堺・博多などの都市が発展し、楽市楽座による都市や周辺地域の間の特産物の流通、印刷技術の革新などにより、国内の物流・情報のネットワークが形成された。これにより新しい生活様式や芸能が、地方の民衆にまで広く浸透した。

こうした天下人や大名と豪商らを中心とする新しい時代の気風を反映した豪壮で国際的な文化を**桃山文化**という。

### 城郭建築と障壁画

20 城郭建築は、権力の象徴として巨大化し、軍事拠点だけではなく政治・経済の中心となった。城郭内部をいろどる障壁画が発展し、さまざまな作品が生み出された。  
城郭建築は、山上の山城から、平野部の平山城・平城へ変化していった。平山城・平城は、鉄砲や大砲など軍事技術の革新に対応する軍事拠点であるとともに、領主や家臣が居住し、領国の政治・経済の拠点となった。城郭は権力の象徴として巨大化し、天守とよばれた高樓建築を中心に、幾重もの濠や巨大な石垣が築かれた。内部の大広間は、主君と多くの臣下が一堂に会し主従関係を示す空間であった。書院造の豪華な御殿



**↑5** 地球儀 ヨーロッパからもたらされ、インド・中国・日本の三国で構成されていたそれまでの日本の世界観が拡大した。  
〈天理大学附属天理図書館蔵〉

資料とあわせて本文を読むことで、桃山文化が  
つちかわれた社会背景  
がわかります。 **特色③**

醍醐寺三宝院表書院・庭園
【茶室】妙喜庵茶室(待庵)
【遺構】伝聚楽第遺構・大徳寺唐門
西本願寺飛雲閣
伏見城遺構・都久夫須麻神社本殿
絵画
『洛中洛外図屏風』『唐獅子図屏風』
『檜図屏風』(狩野永徳)
『松鷹図』『牡丹図』(狩野山楽)
『職人尽図屏風』(狩野吉信)
『南蛮屏風』(狩野内膳)
『松林図屏風』(長谷川等伯)
『山水図屏風』(河北友松)

**↑6** 桃山文化



↑1 妙喜庵茶室(待庵) 千利休

の作とされる2畳ほどの茶室で、

豪商たちの間で茶の湯が流行した背景について記述しています。

特色②



↑3 三味線を弾く人とすごろく

で遊ぶ人 (彦根屏風) (部分) 彦根城博物館蔵

### 世界の木綿の流入と衣服の変化

保湿性・耐久性に優れた木綿は、もともと朝鮮からの主要な輸入品であり、高級品として一部の公家の装束や船舶の帆などに使用されていた。15世紀後半、三河を中心に国産化が始まった。戦国時代になると、木綿は鉄砲の火縄や野戦用の衣料として重宝され、戦国大名によって国産化の動きが加速した。江戸時代には広く庶民の衣服として普及し、加工や染色を施されて生活のなかに広まりをみせた(→p.179)。

① 懐石料理 禅宗の僧が修行中に食べていた質素な食事が、千利休らによって茶会で客をもてなす料理に発展した。侘茶の素朴さやもてなしの精神が体現され、食材を生かした日本料理の起源となった。



↑2 かぶき踊り 歌舞伎は、阿国などが行った女歌舞伎から始まった。庶民や宣教師

なども含め、多くの見物人が押しかけた。(歌舞伎図巻) (部分) 徳川美術館蔵

や瓦や壁に張られた金箔は、天下人や大名の富や権力の象徴となった。

城や寺院の襖・天井や屏風には、金地に花鳥や山水、賢人のほか、竜虎や獅子、鷹などの画題を青や緑の濃厚な色彩で描いた濃絵の障壁画が描かれた。狩野永徳は、信長の安土城や秀吉の大坂城・聚楽第の障壁画を手がけ、大和絵と水墨画を融合させた雄大な作品をつくり上げた。その後も狩野山楽など、狩野派の門人たちが大規模な工房を組織して、その装飾性を高めた。そのほか、長谷川等伯や海北友松も障壁画の傑作を残した。都市のにぎわいを描いた洛中洛外図、異国の文物や人々を描いた南蛮屏風、さまざまな生業を描いた職人尽絵など、さまざまなテーマで屏風絵が描かれた。

### 庶民に広まる文化と生活の変化

豪商を中心に茶道などの文化が発展し、能やかぶき踊りなどの芸能が人々の間で人気を博した。衣食住様式も変化した。

京都・堺・博多の豪商たちは、茶の湯を通して天下人や大名と交流を深めた。堺の町人であり、信長・秀吉に重用された千利休は、華美さをそぎ落とした素朴な侘茶を追求して、茶道を確立した。茶器は従来、中国産が重用されていたが、利休らにより、日本産の優れた茶器がつくられていった。また侘茶の精神を体現した茶室、庭園も生まれた。

芸能では、能や幸若舞が信長・秀吉に愛好され、能は狂言とともに武家の公式の芸能となった。一方民衆の間では、出雲阿国が京都で始めたか

ぶき踊り(阿国歌舞伎)も評判をよび、琉球から伝来した三味線の伴奏で語られた人形浄瑠璃や、堺の高三隆達による隆達節も人気を集めた。

生活については、衣服では、武士や豪商の間で麻に代わって木綿が普及し、色彩やデザインの豊かな小袖が流行した。また、袴に肩衣を合わせた袴姿が男性の正装となった。食事では、砂糖や醤油が調味料として

### 地域の歩み 西日本の伝統窯業

侘茶が盛になると、名物とよばれた茶壺や茶釜、茶碗が珍重され、大名たちが競って求めた。そうしたなかで朝鮮の陶工が、朝鮮出兵で大名に連行されたり、みずから移住したりして日本に定着し、西日本で陶磁器の生産を始めた。こうして、有田焼や薩摩焼など、西日本各地で窯業が栄える基盤が形成された。17世紀には、これらの海外での需要が高まり、日本の主要な輸出品となった(→p.164)。

→4 朝鮮の陶工による陶磁器の主な産地



使われるようになり、「一汁三菜」の懐石料理も生まれた。都市では、それまでの板葺きから瓦屋根の2階建ても現れた。

### 多様な海外文化の流入

南蛮貿易により、さまざまなヨーロッパの文物が日本に流入した。また、朝鮮出兵による捕虜は、日本に新しい大陸の技術を伝えた。

16世紀半ばに始まり、信長・秀吉も盛んに行ってきた南蛮貿易は、日本国内にヨーロッパの文化をもたらしこととなった(南蛮文化)。

日本に來航したポルトガルの宣教師や貿易商人らは、天文学や医学、地理学、航海術などのヨーロッパの知識・技術をもたらし、日本の学問・技術体系に大きな影響を与えた。パン・カステラ・じゃがいもといったヨーロッパやアメリカ大陸の食べ物、油絵・銅版画・西洋音楽といった文化ももたらされた。また、布教のためにもたらされた活版印刷術により、ローマ字による印刷・出版が行われ、宗教書だけでなく日本の古典・辞書なども出版された(キリシタン版)。

日本が輸出した文物としては、ヨーロッパで漆器の人気が高く、後に日本でヨーロッパ向けに注文作成されるようになった。

一方で、秀吉による朝鮮出兵に伴い、朝鮮文化の流入も進んだ。朝鮮に出兵した諸大名は、朝鮮人の技術者を日本へ連行した。特に侘茶において、朝鮮の茶器の評価が高まっていたことから、諸大名は朝鮮人陶工を求めた。彼らにより、西日本に陶磁器の製法が伝わり、各地で製造が進められた。また、朝鮮人技術者からも活字印刷が伝わり、漢字やかな文字による儒教の経典などの出版が行われた。

### 1章のまとめ

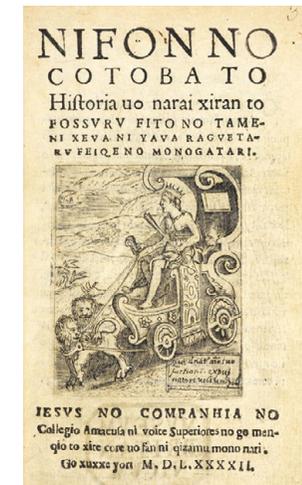
- ① 中世と近世で、「時代が移行した」とあなたが思う事項を、さまざまな視点から書き出そう。
② 中世と近世の最も大きな違いは何か、周りの人と話し合ってみよう。
③ 話し合いをもとに、近世という時代の特色をあなたはどのように考えるかを書き出そう。そして、3部の学習を進めるためのあなたの「探究する問い」を表現しよう。

### 探究する問いを表現しよう

私は、近世の特色は、\_\_\_\_\_だと考える。
3部では、\_\_\_\_\_を探究したい。

Table with 2 columns: Japanese, Portuguese. Rows include: オルガン, ビードロ, かぼちゃ, カステラ, タバコ, 合羽, シャボン, 金平糖, おんぶ, 更紗, かるた, 天ぷら, ボタン.

### ポルトガル語由来の日本語



↑6 天草版「平家物語」 ポルトガル語式のローマ字で書かれており、日本を訪れた宣教師が日本語を学習する際の読本として編集された。(イギリス大英図書館蔵)

### 4項の振り返り

学習内容を踏まえ、p.151の4項の課題に答えよう。

1章末には、まとめとして「探究する問い」を表現するワークを設置しています。探究学習に取り組みやすい構成です。特色⑤

ワークシート 演習問題



# 2章 歴史資料と近世の展望



ワークシート

2章では、1章であなたが表現した「探究する問い」に沿って、歴史資料の読み解きとテーマの考察を行い、そこから近現代の特色について仮説を表現しよう。

## 探究TRY① 江戸城から幕府と大名の関係を考える

近世には、徳川家が全国を統一し、各地の大名を支配した。このページでは、徳川将軍家の居城である江戸城に関する資料から、将軍と大名の関係を考察し、そこから近世の特色について仮説を表現してみよう。

各部2章は、資料読解を通して仮説を表現する「探究TRY」としています。3テーマ設置しているので、興味のあるものを選んで取り組みます。この見開きでは、江戸城の石垣をはじめとした手伝普請から、近世の政治の特色を考察し、仮説を表現します。 **特色⑤**



江戸城の石垣



伊予松山藩 加藤氏



筑前福岡藩 黒田氏



豊後白杵藩 稲葉氏

江戸幕府を開いた徳川家康は、みずからの居城として、江戸城を築城した(→p.147)。1603年から38年まで、築城工事が行われ続け、ほかの大名の居城とは一線を画す、巨大な城郭が完成した。

東京の都心部に現存する江戸城の石垣をよく見ると、さまざまな印が刻まれている。これは、築城に参加した諸藩の大名が、自身の担当箇所を示したものである。石垣全体では、東北から九州まで全国各地の大名の刻印が、合計数万個以上は見られるという。

江戸時代の交通は主に徒歩であり、京都から江戸までの移動には、約2週間を要した。そのようななかで、なぜ全国の大名が、江戸城の築城に関わっているのだろうか。さまざまな史料から考察してみよう。

**↑1 江戸城跡と石垣にみられる刻印** 東京都千代田区にある現在の皇居は、江戸城の城郭内に置かれており(→p.223)。その周辺には石垣など江戸城の遺構がみられる。また、東京の都心部には、「丸の内」や「桜田門」など、江戸城に由来する地名が多数残っている。

## Question なぜ、江戸城築城に、全国各地の大名が関わったのだろうか。

### A 築城に関する資料

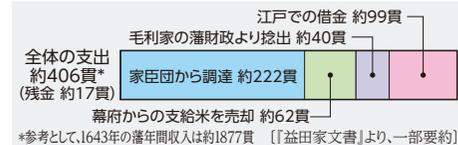
そもそも、築城とはどのように行われるのだろうか。築城の様子やかかった資金から、そこにある苦勞を考察しよう。

**→2 『築城図屏風』(部分)** 築城の様子をテーマとした屏風絵で、16世紀末から17世紀初頭の作である。築城には、石垣の石を切り出し、運ぶ工程が必須であり、江戸城石垣の石は主に伊豆から運ばれた。



建築中の石垣

(55.8cm×210.2cm 名古屋博物館蔵)



**←3 安芸の毛利家が1650年の江戸城修築にかけた資金** 資金は全て、築城に参加する大名の側が負担した。

**疑問** 諸大名が築城を行うにあたって、石運びや石垣づくりを行う人々は、どのように集められたのだろうか。

### B 幕府が命じる手伝普請に関する資料

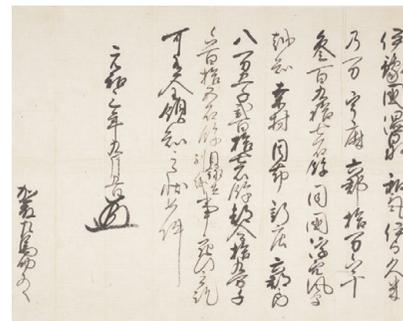
幕府は江戸城以外にも、たびたび諸大名を動員しており、これを手伝普請といった。資料から、手伝普請の役割について考察しよう。



**↑4 宝暦年間(1721)の木曾三川治水計画図** 複雑な流路の木曾川・長良川・揖斐川は、たびたび洪水を起こした。幕府は幾度も大名に手伝普請として治水を命じ、関係した大名は48家にのぼる。なかでも、1754(宝暦4)年から55年に薩摩藩が行った宝暦治水が著名で、薩摩藩は現代の金額で200億円以上の出費をし、80人以上の犠牲者も出した。(岐阜県歴史資料館蔵)

### C 諸大名の考えに関する資料

大名の書簡と記録、また将軍が大名に与える領地宛行状から、諸大名が江戸城築城をどのように考えていたのか考察しよう。



**↑6 領地宛行状** 将軍が全国の大名に発給した、認める領地と石高を示した書状。本図は、加藤氏に伊予の約20万石を認めている。将軍が認める領地は、賞罰により移動・増減した。(愛媛県歴史文化博物館蔵)

**史料** 豊前小倉藩主細川氏から、筑後柳川藩主立花氏への書状(一六三四年)

(江戸城について)関東・東北・信濃の大名たちは堀、西国や上方の大名たちは石垣を担当すると、幕府から通達があったと了解いたしました。とにかく日本全体がくたびれてしまふことが止まりませぬ。それぞれ大名が自分の考えで行うべきかと思いません。

(細川家史料より要約)

**↑立花氏も細川氏も、江戸城の普請に参加している。**

年次、担当、内容
1601~06年(西国の諸大名) 京都の二条城の築城
1610~15年(西国・北国の大名20家) 名古屋城の建築工事
1620~29年(西国の大名64家) 大坂城の再建工事
1660年(仙台藩) 江戸の神田川の拡張工事
1683年(東北・中部の大名4家) 日光東照宮の修復工事
1742~43年(西国の大名10家) 関東の洪水に伴う江戸の復旧工事
1753~54年(薩摩藩) 木曾三川の治水
1784年(熊本藩) 浅間山噴火に伴う河川の復旧工事

**史料** 家康の甥が土佐藩主山内氏へ送った書状(一六二〇年)

：現代の御奉公は、このように幕府の普請などに参加する際に、将軍のお目に留まるに聞いているので、少しも油断しないように、家臣たちにも伝えることが一番です。(『大日本史料』より要約)

**↑5 江戸城以外の主な手伝普請** 18世紀後半以降、各藩は費用だけを負担し、工事は幕府役人らが行う形式が増えた。

**↑大坂城の普請が始まるので、山内家にも動員がかかることを伝えた書状の一部である。**

**疑問** 幕府が手伝普請を命じることには、どのような理由が考えられるだろうか。

**史料** 江戸城築城の福井藩の記録(一六二八年)

：自分たちは、石を運ぶために江戸の材木を買占めて、少ない人員で石を運べたが、熊本藩加藤家は材木の調達がうまくいかず、人を大量にやとつて、人海戦術で藩主みずから首領をとつてみたが、かえって人が多すぎて失敗し、死傷者がでて、運送中に誤って民家を壊すことがよくあった。7、8割できた時、加藤家はまだ1段しか積めていなかった。こちらはうまく梁をたてながら効率よく石垣を積みきれいにできた。

(『国書筆記』より要約)

**疑問** なぜ細川氏は、考えに反して江戸城の普請に参加したのだろうか。また、福井藩の史料では、なぜ大名同士が競い合っているのだろうか。

探究TRYでの資料読解と、1章末で表現した「探究する問い」(p.153)を踏まえて、仮説を表現します。その上で、3章での学習に臨みます。 **特色⑤**

- 仮説を表現しよう**
- STEP 1** ① A・B・Cの資料の疑問について、あなたの考えを書き出してみよう。  
② 周りの人と、それぞれの考えを発表し合い、共通する考えや異なる考えを共有しよう。
  - STEP 2** なぜ、諸大名は江戸城築城に参加したのだろうか。STEP 1や、資料A・B・Cから読み取った内容を踏まえて、あなたの考えを書いてみよう。
  - STEP 3** 1章の学習や「探究TRY」での考察を通して、近世には、古代・中世と比べてどのような共通点・違いがあるのか考えよう。そこから、「近世の特色」はどのようなものか、あなたが考える仮説を表現しよう。  
→「探究する問い」を通して、3章の学習を進めるなかで、あなたが表現した仮説について考えていこう。

## 探究TRY② 琉球王国から近世の対外関係を考える

近世には、日本列島と海外との関係が、中世以前から大きく変質した。このページでは、琉球王国に関する資料から、近世日本の対外関係について考察し、そこから近世の特色について仮説を表現してみよう。

この見開きでは、江戸幕府・中国王朝・琉球王国の関係から、近世の対外関係の特色を考察し、仮説を表現します。

特色⑤



↑1 再現された琉球王国の正月儀礼 中世から近世を通して、首里城で毎年行われた儀礼の再現。日本とも中国とも異なる、独自の様式であった。

**史料** 薩摩藩が琉球王国へ指示した、外国船漂着時の対応

一、大和船を係留している港近くに漂着したならば、すぐ(大和船を)見えない所へ回航すること。

一、日本年号または日本人の名を書いたものなどを漂着人に見せてはならない。

一、漂着場の近辺で大和歌を歌わないよう厳重に申しつけること。

(新編 琉球史料 石垣市史書 4)

中世の琉球王国は、交易などで栄えた独自の国であった(→p.118)。しかし1609年、薩摩藩が琉球王国に侵攻し、琉球王国は実質的に、江戸幕府と薩摩藩の支配下となった。それにもかかわらず、琉球王国では、頻りに中国への朝貢が行われた。対外的には中国を宗主国とする「独立国」としての立場が保たれたのである。この「独立国」という立場は、幕府や薩摩藩が公認していたものであった。資料には、薩摩藩から琉球王国に対する、隠蔽工作の指示までが残されている。

このように、琉球王国が「独立国」として保たれたことには、どのような思惑があったのだろうか。さまざまな資料をもとに、幕府・薩摩藩・琉球王国のそれぞれの立場から考察してみよう。

## Question 琉球王国が「独立国」であることには、幕府・薩摩藩・琉球王国に、どのような思惑があったのだろうか。

### A 琉球王国と薩摩藩・江戸幕府との関係に関する資料

近世の琉球王国は、中国へ朝貢し、そこで得た品々を薩摩で売却する形で、貿易を続けていた。資料から、近世の琉球王国の貿易にはどのような特徴があるのか考察しよう。

**史料** 薩摩藩から琉球王国への書状(一六三三年)

薩摩の借銀は七千貫目以上ある。琉球からの唐の才覚がなくては返済ができないので、そのことをしっかりわきまえ、油断のないようにすること。…琉球の官人を中国に派遣して、次のことを認めてもらうように嘆願すること。

一、二年に一回の朝貢。

一、毎年、年頭のあいさつのために使者を送ること。

一、朝貢の品として持参する、馬と硫黄の量を増やすこと。

一、毎年、皇帝の誕生日のお祝いを述べるために使者を送ること。

一、夜光貝の殻を毎年、進上すること。

(薩摩藩日記雑録 現代語訳 一部要約)

①借銀・借金のこと。薩摩藩をはじめ江戸時代の諸藩は、藩政運営などのため、商人から借金を行っていた。②唐の才覚…ここでは琉球による中国への朝貢貿易を指す。

**支出**

中国への朝貢で使用した銀：182貫366匁  
(うち中国での生糸購入：108貫508匁)  
琉球の百姓からの砂糖購入：140貫  
琉球の士族からのウコン購入：10貫304匁

**収入**

白米の薩摩での売却額：156貫701匁  
砂糖の薩摩での売却額：252貫301匁  
ウコンの薩摩での売却額：17貫400匁

【御財制】

↑2 18世紀前半の琉球王国における銀の収支

←琉球王国がもたらす品々は、日本列島において高く売れた。

**疑問** 琉球王国は、なぜ中国や薩摩藩との貿易を続けたのだろうか。

**史料** 幕府から薩摩藩主へ出された書状(一六四六年)

琉球では中国の様子が知られているだろうから、うわさ程度でもかまわないので、それを薩摩から幕府に伝えるようにしなさい。

(薩摩藩日記雑録 現代語訳)

### B 琉球王国と中国との関係に関する資料

琉球王国は、中国を宗主国として、朝貢を行っていた。琉球王国と中国のつながりに関する資料から、両国の関係を考察しよう。

**史料** 琉球王国の高官が、これから中国に渡航する官人に送った書状(二四〇年)

私達の国では、できれば毎年、表文と貢ぎ物を差し上げ、徳化を受けることで、国内の政治をしかり行いたいと、国王も私も思っている。それが四年に一回の朝貢となってしまうのは、徳化を受けることが難しくなってしまう。…薩摩が必要としている品、琉球が必要としている品もこれまでのように調達することができなくなり、困難な事態となるだろう。そのことをよく心得、渡唐したら早速、朝貢の頻度についての嘆願の文書を(中国側に)差し出し、願いを認めてもらえよう努めなさい。

(鄭氏家譜 現代語訳)



国宝



拡大



守礼之邦

←4 首里城の守礼門 扁額は明の皇帝から「琉球は守礼の邦」といわれたことに由来する。沖縄戦で消失、戦後再建された。

**疑問** 琉球王国にとって、中国とは、どのような存在だったのだろうか。

### C 琉球王国から江戸幕府への使節に関する資料

琉球王国には、江戸幕府の将軍と琉球国王の代替わりの際、江戸城へ使節を送る義務があった。使節に関する資料から、どのような意味や効果があったか考察しよう。



↑5 琉球使節を描いた瓦版 琉球使節が通過する沿道には、見物する庶民が多数訪れた。この瓦版には、使節の人々の役割や立場が書かれている。日本人々は、行列見物や瓦版により、琉球王国への知見を深めた。(天保十三年 御免琉球人行列附) (部分) 東京都江戸東京博物館所蔵)

**史料** 琉球使節を見物した人がよんだ和歌

うるまがた 五百重の波の よそなれど  
貢の道は 隔ざりけり  
訳・琉球ははるか遠く離れた海の向こうだが、その遠さにも関わらず日本に貢ぎ物を持って来るのだなあ。

(「買の八十船」)

**疑問** 琉球使節を見た日本人の人々は、どのような感想をもったのだろうか。

探究TRYでの資料読解と、1章末で表現した「探究する問い」(p.153)を踏まえて、仮説を表現します。その上で、3章での学習に臨みます。

- 仮説を表現しよう**
- STEP 1** ① A・B・Cの資料の疑問について、あなたの考えを書き出してみよう。  
② 周りの人と、それぞれの考えを発表し合い、共通する考えや異なる考えを共有しよう。
- STEP 2** 琉球王国が「独立国」であることには、どのようなメリットがあったのだろうか。STEP 1や、資料A・B・Cから読み取った内容を踏まえて、幕府、薩摩藩、琉球王国のそれぞれの視点から、あなたの考えを書いてみよう。
- STEP 3** 1章の学習や「探究TRY」での考察を通して、近世には、古代・中世と比べてどのような共通点・違いがあるのか考えよう。そこから、「近世の特色」はどのようなものか、あなたの仮説を表現しよう。  
→「探究する問い」を通して3章の学習を進めるなかで、あなたが表現した仮説について考えていこう。

# 探究TRY③ 女性の旅日記から近世の社会を考える

近世には、中世以前と比べて、庶民を中心に社会が大きく変化した。このページでは、庶民の旅行に関する資料の特色について仮説を表現してみよう。

この見開きでは、女性の旅日記などから、近世の社会や生活・文化の特色を考察し、仮説を表現します。 **特色⑤**



- ① 伊勢神宮に参詣する人々「一生に一度は伊勢参り」といわれた。(神奈川県立歴史博物館)
- ② 中村いとの旅のルート



近世には、さまざまな庶民の遊興が発達したが、その一つに旅行がある。人々は伊勢神宮への参詣をはじめ、長い距離を旅することもあった。多くの旅行者は、自身の旅程を日記に書き残した。そのなかに、江戸から日本各地を旅した中村いと『伊勢詣の日記』がある。いとは、代々幕府へ献上する畳を扱う、裕福な商人の妻である。彼女は1825年3月13日、年齢は30代半ばのころ、男6・女4人の計10人で旅に出た。目的地は伊勢神宮だが、いとは宮島や岩国まで旅を続け、6月4日に帰宅した。なぜ、いとは、このような長い旅行に出られたのだろうか。いとの日記や、そのほかの資料から、仮説を立ててみよう。

## Question なぜ中村いとは、このような長い旅行に出られたのだろうか。

### A 旅に出る前の生活に関する資料

いとは日記の序文に、旅に出るまでの生活を記している。日記や資料から、いとの暮らしや考えなどを考察しよう。

『伊勢詣の日記』序文  
 …子どもたちも多く、手仕事や家事も多いので、少しでも静かな空き時間のある時は、名所図会などという本を繰り返し読み、その名所で過ごしている自分を想像した。…  
 …旅路は遙かに長く、そのうえ女子の身なので、一人で旅行に出ることは難しい。ともかくにも女子の身なので、心で願うのみで、願いはかなわないことが多いのが世の常なのだ、と感じて暮らしていた。…



↑ 『都名所図会』の挿絵 本書は京都の名所を紹介する地誌本で、詳細な解説が挿絵とともに記された。近世後期、名所図会はさまざまな地域をテーマに発行された。(国立公文書館蔵)

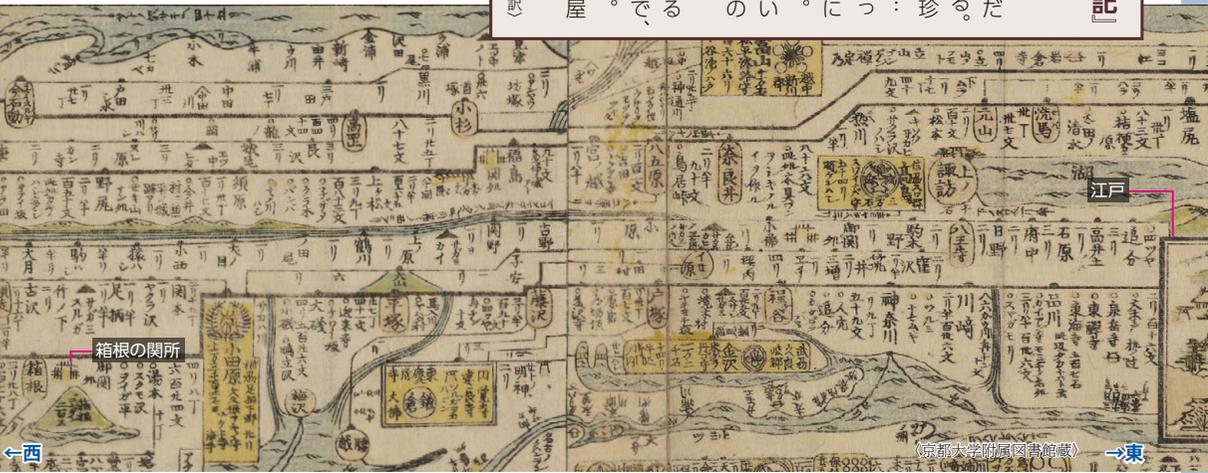
→江戸時代の人々は、寺小屋で読み書きを学んだ。女子はその後、こうした本で女性の心得を学ぶことが多かった。

『女子用の教訓書』女大学  
 …夫を主君とて、敬い慎んで仕えること。軽んじたり侮ったりしてはならない。総じて、女の道は、人に従うことにある。夫に対する時は、顔色と言葉遣いを、丁寧へりくだって、穏やかであること。…女は夫を天とするものである。夫に逆らって、天罰を受けてはならない。(現代語訳)

疑問 なぜいとは、普段から名所図会に親しむことができたのだろうか。また、なぜ自分は旅ができないと考えたのだろうか。

### B 目的地への行程に関する資料

いとは、目的地に着くまでの行程も、日記に詳しく書き残している。日記や資料から、近世の交通について考察しよう。



↑ 『大日本道中行程細見記』(部分) 街道・宿場・関所などが、現在の鹿児島から青森まで描かれている。関所では、江戸方面に入る鉄砲や江戸方面から出る女性を取り締まった。しかし関所抜けが横行し、地域住人の軋旋も多くみられた。 **QR探Q資料**

疑問 なぜこのように、街道や宿場が整えられたのだろうか。

### C 滞在地での活動に関する資料

いとは、滞在地でさまざまな活動を行っている。それらの日記から、近世の社会について考察しよう。

『伊勢詣の日記』伊勢参詣  
 4月2日 伊勢…今日伊勢神宮に参詣できていることも、当主が快く許し、旅の費用を惜しまず出してくれたからで、うれしいことだ。ただ、中村家の子孫の繁栄と仕事の繁盛を願う奉った。…  
 4月3日 伊勢朝熊山へ詣でようとして皆で肩輿で行った。山上には…弁当や酒などがたくさん取りそろえられていた。…  
 4月5日 伊勢買物などをそろえて、江戸への土産物を確認し、ここを出発する準備をあれこれ行った。…

『伊勢詣の日記』大坂から船旅へ  
 4月20日 大坂皆が一同に言う、ここまで来たのだから、讃岐に渡って金毘羅参詣しよう、と。今夜から船に乗ることにし、昼は角の芝居を見物するといと勧められた。皆で行った。芝居の引退舞台で繁盛していた。…  
 4月25日 讃岐丸亀に着いて金毘羅に詣でた。…弘法大師の善通寺や、屏風ヶ浦なども眺め…大黒屋という宿に一夜泊まった。  
 5月1日 宮島周辺…ここには清盛公のお墓がある。船の中から見上げる。…  
 5月3日 岩国…(岩国)町並みは…江戸の化粧品屋などのように立派だ。(名所の)錦帯橋は、浅草の観音堂にかかっている額の絵と同じだった。…

疑問 いとが訪れたのは、どのような場所だったのだろうか。また、なぜいとはこれほど多くの場所を訪れることができたのだろうか。

仮説を表現しよう 探究TRYでの資料読解と、1章末で表現した「探究する問い」(p.153)を踏まえて、仮説を表現します。その上で、3章での学習に臨みます。 **特色⑤**

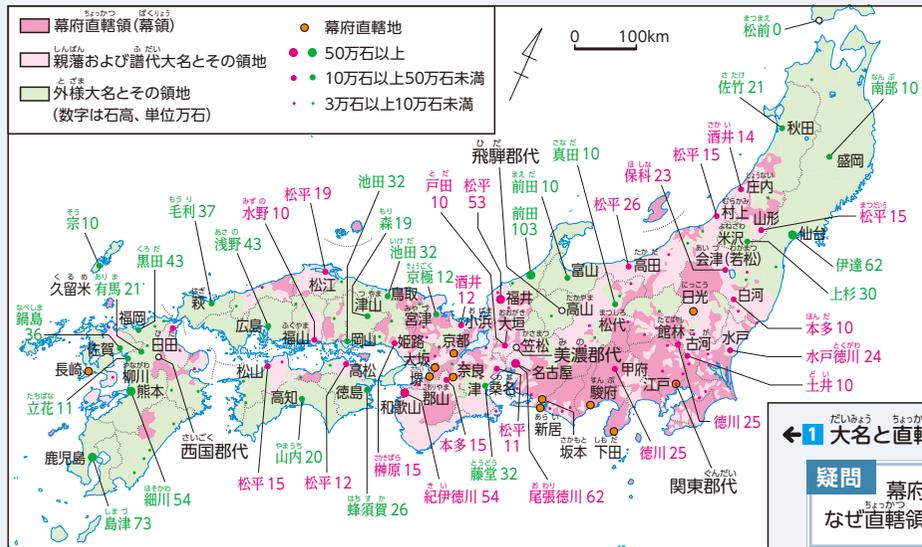
- STEP 1 ① A・B・Cの資料の疑問について、あなたの考えを書き出してみよう。 ② 周りの人と、それぞれの考えを発表し合い、共通する考えや異なる考えを共有しよう。
- STEP 2 中村いとが長い旅行に出られたことには、どのような理由や背景があったのだろうか。STEP 1や資料A・B・Cから読み取った内容を踏まえて、あなたの考えを書いてみよう。
- STEP 3 1章の学習や「探究TRY」での考察を通して、近世には、古代・中世と比べてどのような共通点・違いがあるのか考えよう。そこから、「近世の特色」はどのようなものか、あなたが考える仮説を表現しよう。 →「探究する問い」を通して、3章の学習を進めるなかで、あなたが表現した仮説について考えていこう。

# 3章 近世社会の展開と変容

## 1節 幕藩体制の確立

節の問い 江戸幕府は、全国の支配体制をどのように整備したのだろうか。

用語解説 一問一答など



種類	石高(万石)
禁裏御料	約3
公家領	約7
寺社領	約40
大名領	約2250
旗本知行地	約300
直轄領	約400
全国の総石高	約3000

江戸時代中期の日本列島の石高

大名と直轄領の分布(1664年)

疑問 幕府が全国を統一したのに、なぜ直轄領が少ないのだろうか。

### 1項 幕藩体制の形成

項の課題 江戸幕府による全国統治の体制には、どのような特徴があるのだろうか。

① 大名統制の方針 大名どうしの私的な結束や戦闘を封じることが目指した。そのため、大名家どうしの婚姻や城の修理などには、幕府の許可が必要と取り決め近隣との紛争も厳しく取り締まった。

#### 幕府による大名統制

江戸幕府は平和な社会を維持するため、大名の活動を制限しつつ、負担を強いた。一方で、大名の藩支配に対して保証を与えた。こうした体制を幕藩体制という。

江戸幕府を開いた徳川家康は、1616(元和2)年に死去した。武家諸法度や一国一城令など大名統制の基本法は制定されていたので、2代将軍徳川秀忠の課題は、法令を運用し「徳川の平和」を保つことであった。

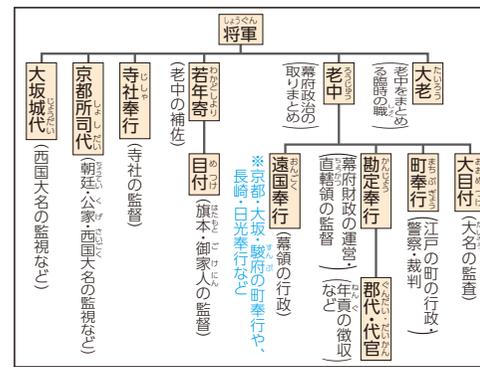
秀忠は、大名や公家・寺社などへ、領地の支配を認める領地宛行状を発給し、将軍との上下関係を示した。大名とは、石高1万以上の領地をもち将軍に仕える武士で、大名の領地を藩とよぶ。大名は、徳川家の分家である三家などの親藩、戦国時代から徳川家に従う譜代、関ヶ原の戦い以後従った外様に分かれ、幕府政治への関わり方が異なった。大名は、将軍への服従を証明するため、江戸に藩邸を構え人質として妻子を住ませ、参勤交代により領地と江戸を往復した。参勤交代は当初自発的だったが、3代将軍徳川家光は武家諸法度を改正(寛永令)し義務化した。

将軍は大名を統制し、戦争に従事する軍役だけではなく、さまざまな負担を強いた。城郭や治水など大規模工事への参加(手伝普請)や、将軍の京都上洛・日光社参に軍隊を随行させることなどがあった。これらは、将軍の権威を人々に示すことにつながった。

秩序の安定と体制の継続を第一とする、徳川将軍の統治の特徴が読み取れます。 特色②

↑3 日光東照宮 東照大権現として神格化された徳川家康をまつる霊廟で、将軍家はたびたび参詣した。なかでも写真の陽明門は、工芸技術の粋を集めた華麗な建築である。

② 旗本・御家人 将軍への謁見が許されたものを旗本、許されないものを御家人とよぶ。



#### ↑4 江戸幕府のしくみ

家光期までには、将軍と諸大名との関係が主従関係として強固に固まった。このような、将軍を頂点とする上下関係のなかで、将軍と諸大名らが全国の土地や人々の大半を支配する体制を、幕藩体制という。

#### 幕府の組織

江戸幕府は、武士の家を引き継ぐ形で整えられ、老中を政治の中心とする組織がつけられた。幕府は年貢と鉱山収入を財政基盤とした。

江戸幕府は、徳川家という武士の家の組織が拡大し、戦国大名となつて、そのまま国家を統治する組織に変遷して成立した。そのため、旗本・御家人といった将軍に日常的に仕える家臣(幕臣)は、戦国時代の家臣団のように、さらにそれぞれが家臣を抱えていた。

国家の統治は、江戸城にいる将軍を、幕臣たちが補佐する形で行われた。中心となったのは複数名からなる老中であり、政策決定や諸大名との調整や指示を行った。老中を補佐する若年寄は、将軍の直轄の軍団である旗本や御家人を管理した。また、必要に応じて大老も置かれ、重要な政策事項決定に関与した。

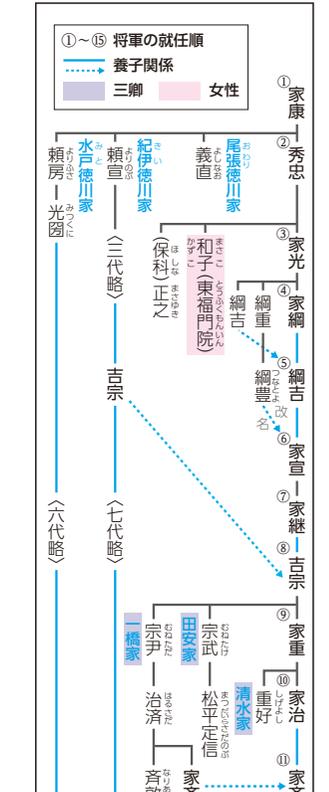
行政は、江戸の都市を管理する町奉行、全国の寺社を監督する寺社奉行、幕府財政や農村部の幕府領の行政全般を担当する勘定奉行が重要な役職であり、三奉行と称された。全国の幕府直轄領(幕領)には、勘定奉行の配下の郡代・代官が着任した。また、長崎や伊勢・佐渡など、農村以外で重要な役割をもつ直轄地には、おんごく奉行が派遣された。さらに、政治経済上重要である上方には、京都所司代・大坂城代などが置かれた。武士たちの不正や反乱などを防ぐことも重要であるため、大名を監査する大目付、幕政全般や旗本を監督する目付が設けられた。

幕府の財源は、17世紀前半は年貢と鉱山が中心であった。幕府は直轄地を全国の15%程度もち、そこから年貢を徴収した。また、石見銀山や佐渡金山など主要な鉱山を直接管理し、金銀で貨幣を鑄造して財政基盤とした。商業や貿易も統制し、そこから収入を得たり、物価統制を行ったりした。

#### 江戸幕府の「奥」 人権・ジェンダー

江戸幕府には、国家の統治機関と、徳川家の家政機関という二つの側面があった。国家として内政や外交を担当する部分を「表」と称し、徳川家当主の将軍や妻子の身の回りの世話をする部門を「奥」とした。「奥」はさらに、将軍の居住に関する「中奥」と、妻子に関する「大奥」に分かれた。特に大奥は、徳川家の血筋を維持することが最大の目的で、妻子らの生活空間は女性の役人により運営され、将軍や子供たち以外の男性は原則居住しなかった。

→5 春日局 3代将軍家光の乳母で、大奥の礎を築いた。(模本 部分 東京国立博物館蔵)



幕府の財源についても記述しており、p.140などで学習した戦国大名の鉱山開発と関連づけて学習できます。また、p.188で学習する、17世紀末の幕府財政悪化にもつながります。 特色②

#### ↑6 徳川氏の系図

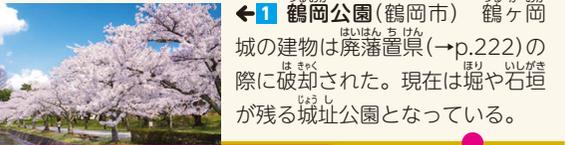
③ 役職への任命 大老・老中・若年寄・寺社奉行は譜代大名から、町奉行と勘定奉行は旗本から任命された。権力の集中を避けるため、大老以外は、複数名が任命された。

**地域の歩み** 譜代藩の事例：庄内藩のしくみと歩み

庄内藩は、三河以来の譜代大名藩で、鶴ヶ岡城を居城とする。公式の石高は14万8千石だが、新田開発や運上(→p.173)の徴収により、実際には18万石ほどの経済規模があったとされる。米の生産が豊かで、藩の財政基盤は安定していた。藩内の酒田は、北前船(→p.183)の拠点として繁栄した港湾都市で、ここでの運上なども藩財政に貢献した。

家臣団は徐々に増加し、幕末は領内人口の8%であった。俸禄制の家臣が中心だが、藩からの俸禄支給の分配は少なかった。そのため江戸勤務を担う家臣は困窮したが、物価が安い国元では、家臣の生活はある程度安定していた。

幕末には、酒田の経済力を背景に最新鋭の武器を装備し、戊辰戦争(→p.220)で新政府軍をかなり苦しめた。



**1 鶴岡公園**(鶴岡市) 鶴ヶ岡城の建物は廃藩置県(→p.222)の際に破却された。現在は堀や石垣が残る城址公園となっている。

**地域の歩み** 外様藩の事例：佐賀藩のしくみと歩み

佐賀藩は、戦国大名龍造寺家の家臣であった鍋島家から始まる外様藩で、佐賀城を居城とする。公式の石高は35万7千石だが、肥沃な二毛作地帯を有し、有明海干拓も進めたため、実際には50万石を超える生産力を誇った。有田焼などの陶磁器輸出も、藩財政に大きく貢献した。

家臣団には戦国時代以来の者が多く、領内人口の15%近くに達した。地方知行の家臣が多く、小大名に匹敵する領地をもつ者もあり、各人がある程度自由に統治した。彼らは剛直で武芸に励む一方、遊興も派手に行うなど、独自の風土が広がっていたとされる。

近世後期には、フェートン号事件(→p.205)を契機に西洋型軍隊への転換を進め、幕末は新政府軍の中核を担った。

**2 佐賀城城門**(佐賀市) 佐賀の乱(→p.243)の弾痕も残る。



重文

本文とコラムで、将軍と諸大名との関係性や、藩内統治の実態などを記述しており、幕藩体制のしくみが具体的にわかります。 **特色③**

**1 大名処罰の理由** 武家諸法度などの法令違反だけではなく、領民支配の失敗による百姓一揆の発生や、家臣団の内紛を大名が抑えられなかったことなど、大名の領地内での出来事も処罰の対象となった。

**2 江戸時代初期の改易** このころの改易で最も多い事例は、藩主が死去したときに跡継ぎが決まっていない場合であった。

**3 藩邸** 大名は江戸・大坂・京都などに藩邸を設けた。江戸藩邸は常に妻子が住み、参勤交代で同行する家臣が滞在した。上屋敷・下屋敷など複数の屋敷があり、維持に費用がかかった。大坂の藩邸は蔵屋敷とよばれ年貢や特産品を換金する場であった(→p.182)。

**藩の政治**

大名は将軍に奉公するために多くの負担もあるが、藩内政治の自由度は非常に高かった。戦争のない時代に大名と将軍は相互依存する面があった。

大名は将軍から藩の支配を認められたが、領地は大名の財産ではなく、あくまで将軍から貸し与えられたものであった。そのため、幕府の戦略的な大名の配置替え、また褒美や処罰などの理由から、将軍の命による領地の移動(転封)や拡張・縮小(加増と減封)、また領地の没収(改易)があった。秀忠や家光の時期は、特に大名の改易が多く行われた。

一方で大名は、幕府が全国に定める重要法令を徹底すれば、藩内で独自に法や制度を定めることができたため、藩内統治の自由度は非常に高かった。大名の家臣(藩士)は、基本的に大名が住む城下町に集住した。家臣は、農村部に知行地を与えられる場合(地方知行制)と大名から直接米穀などが支給される場合(俸禄制)があり、これも藩によって異なったが、時代を経るにつれて俸禄制が増えていった。一方、東北や九州などの、中世以来の大きな大名が支配する藩では、家臣が小さな大名並みの領地を与えられてその地域に住むなど、独自の支配形態もみられた。

17世紀は、大名と家臣との関係も安定しておらず、お家騒動とよばれる内紛も発生した。騒動が発生すると、幕府は秩序の維持を優先させ、内紛が本格的な争いに発展することを避けるため、大名を支持してしづめようとする場合が多く、これにより大名は、幕府の権威を背景に家臣団を統制することができた。

大名の財源は、年貢のほか、漁業・林業・鉱山・商業など、地域によって多様であった。一方で大名は、参勤交代や藩邸の維持、ほかの大名や旗本・幕府要人との交際など、必要経費が多かった。幕府の命による手



**3 参勤交代** 多数の武士が移動するため、緻密な旅程が組まれた。大名は参勤を将軍への奉公と考え、大規模で華麗な行列を用意した。しかし、幕府は大名に出費を抑えるよう指示していた。〔会津藩主参勤交代行列図〕会津若松市立会津図書館蔵

伝普請や将軍の移動への随行も、ほとんど自費で行わねばならなかった。

そのため多くの藩の財政は、近世初期から苦しかった。

**近世の朝廷と寺社**

中世から続く、天皇・朝廷や宗教勢力は、幕府による統制を受けながら、幕藩体制を支える要素として位置づけられ、存続した。

武士が全国を統治した近世にも、天皇や朝廷は伝統的権威を保持し続けていた。秀吉や家康が、天皇の権威を利用して全国支配を確立したように、権威をもつ天皇や朝廷が、幕府将軍の権力を認めることで、幕藩体制の存続がより安定化した。

幕府は、天皇や朝廷が政治に関与せず、またほかの大名に権威を利用されないよう、強い制限を加えた。1615(元和元)年、幕府は禁中並公家諸法度を発し、天皇や朝廷内の公家のなすべきことを定めた。天皇には日本の王として必要な学問、特に儒学を修めることを求めた。また幕府は、京都所司代や、公家から選んだ連絡役の武家伝奏を通じて朝廷を統制した。古来朝廷が保持してきた官位授与や改元・改暦の権利は残されたが、幕府の同意が必要とされた。天皇や公家は領地も少なかったが、一方で官位は高く、権威と伝統文化を活用して収入を得る公家もいた。

17世紀前半は、朝幕関係も不安定であった。2代将軍秀忠は、娘の和子(東福門院)を後水尾天皇に入内させ、朝廷内に勢力を広げた。一方、後水尾天皇が幕府に無断で僧侶に紫衣を与えたことに対し、それを無効にして幕府の優位を示した(紫衣事件)。これに抗議した後水尾天皇は、幕府の同意を得ずに退位し、娘を明正天皇として即位させた。

宗教の諸派へも、幕府は規制を強めた。17世紀初頭から宗派ごとに寺院法度を定め、各宗派内では本山が末寺を統制するようにし(本末制度)、1665(寛文5)年に全宗派共通の諸宗寺院法度を出した。また寺請制度により、寺院は人々を檀家として組織化し、彼らがキリスト教徒でないと証明する宗門改めを行い、幕藩体制を支えた。神社や神職にも諸社欄宣神主法度が定められた。そのほかの宗教も、幕府は統制や弾圧を進めた。

**史料** 禁中並公家諸法度

天子諸芸能の事、第一御武家の官位は、公家当べき事、  
一 閑白・伝奏并奉行職事堂上地下の輩、相背くに流罪たるべき事、  
一 紫衣の寺住持職、先規近年猥りに勅許の事、  
一 堂上地下の輩、公家には上級の堂下家という区分があり、その双方を指す

**権力をもつ徳川将軍と、権威をもつ天皇・朝廷が、どのような関係性にあったのかを記述しています。** **特色②**

**3 紫衣勅許の禁止** 紫の衣は、古代以来、天皇の勅許によってのみ高僧が着ることを許されていた。幕府は禁中並公家諸法度で、無許可での紫衣勅許を禁止していた。

**4 諸宗教の統制と弾圧** 山岳信仰の修験道は本末制度で統制し、陰陽道は公家の土御門家が組織化して認められた。幕府の統制に従わない日蓮宗不受不施派は弾圧された。また、幕府だけではなく大名も独自に宗教を統制する場合があります。九州南部の薩摩藩や人吉藩では、浄土真宗(一向宗)も禁じられた。

**近世の公家と伝統文化**

17世紀後半に110家余りあった公家は、それぞれ幕府より領地を与えられていたが、その石高は、中級の旗本やそれ以下で、同じ官位の武士と比べて圧倒的に少なかった。

ただし、芸能集団や技能集団の家元や管理者(家職)としての古代以来の役割を担っていた公家は財政が豊かな者もいた。例えば和歌や楽器を家職とした場合は、免状の許可や指導によって別に収入を得ていた。

縄文
B.C.
A.D.
1 弥生
2
3
4 古墳
5
6
7 飛鳥
8 奈良
9
10 平安
11
12
13 鎌倉
14 南北朝
15 室町
16 戦国
17 安土・桃山
18 江戸
19 明治
20 大正
21 昭和
平成
令和



←1 『風神雷神図屏風』  
俵屋宗達の最高傑作とされる。左右の端に風神と雷神を登場させることで、迫力が出ている。また、金箔部分の多さは、無限の空間の広がりを感じさせる。宗達は平安期の古典などを伝統的な主題をよく描いた。(図録) 大本山建仁寺蔵 各157cm×173cm)



↑2 『色絵花鳥文大鉢』 乳白の白磁の上に、華麗な絵付けが施されている。柿右衛門様式の作品で、ヨーロッパで人気を博して盛んに輸出された大鉢と同様のものと考えられている。(東京国立博物館蔵 高さ21.4cm 口径30.3cm)

① 侍講 君主に仕え、儒学などの学問を講義する人物のこと。

寛永文化の特色や社会背景を端的に記述しています。特色②

絵画
【狩野派】『大徳寺方丈襖絵』(狩野探幽)
【装飾画】『風神雷神図屏風』(俵屋宗達)
【風俗画】『夕顔納涼図屏風』(久隅守景)
工芸
【漆器】『舟橋時絵硯箱』(本阿弥光悦)
【陶磁器】【赤絵】(酒井田柿右衛門)
【染焼】(本阿弥光悦)
文学
【俳諧】(松永貞徳)
【仮名草子】
学問
【朱子学】(藤原惺窩)
(林羅山)→林家

↑3 寛永文化

1項の振り返り  
学習内容を踏まえ、p.160の1項の課題に答えよう。

寛永文化

平和の時代の到来とともに、新たな価値観が育まれた。中世の文化も継承した、新しい文化が、さまざまな分野で生まれていった。

平和の時代が到来した17世紀前半を中心に育まれた文化を、寛永文化という。政治の中心は江戸に移ったが、文化の発信地は中世以来高度な工芸技術をもつ京都であり、天皇・公家・僧侶・裕福な町衆など上流の階級が担い手となって、美術・文芸・建築などにおいて、中世の文化を継承しつつ、新たな価値観が育まれていった。

美術のうち絵画では、京都の町人俵屋宗達が大胆な構図で新たな様式をつくり、やがて琳派へと発展した。また唐絵では、狩野派の狩野探幽が江戸城などの障壁画を描いた。彼の孫は代々幕府の絵師となり、江戸の画題に影響をもった。工芸では陶磁器の技術がさらに発展し、酒井田柿右衛門が赤絵といわれる技法で芸術性の高い焼き物をつくった。この時期、中国における陶磁器の一大生産地である景德鎮が、明清交替の混乱で衰退しており、代わって日本の陶磁器が海外に輸出されて、ヨーロッパでも高く評価された。また、本阿弥光悦は徳川家康の庇護の下、陶磁器ともに、刀剣や書道、陶芸など多様な優れた工芸品を残した。

文芸では、中世の競技としての性格が強い連歌のなかから、俳諧が登場し、貞門俳諧や談林派となって次の元禄文化へとつながっていった。

建築では、桃山文化の豪華絢爛さを継ぐ権現造の霊廟建築日光東照宮や、茶室の精神を取り入れた数寄屋造の柱離宮や修学院離宮が登場した。

そうしたなか、学問では、禅僧や武士・公家の一部が学んでいた儒学が注目され、武士や庶民に普及し始めた。この背景には、戦がない世の中で、新たな政治や道徳の規範が求められたことがあった。元僧侶の藤原惺窩は、朝鮮出兵による被虜人の朝鮮人儒学者姜沆の影響を受け、儒学のなかでも朱子学を広めた。惺窩に学んだ林羅山は、徳川家康の助言役として活躍して將軍家の侍講を勤め、子孫は幕府の儒者(林家)となった。木版出版も始まり、教訓書である仮名草子などが出版された。



段階的に行われた幕府の貿易統制や、各国の動きについて、その背景とともに記述しています。特色①

2項 近世日本の対外関係

貿易統制の強化と島原・天草一揆

幕府は、キリスト教禁教政策の強化を進めた。同時に外国との関係を縮小し、外国船との貿易場所や方法に制限を加え、日本人の海外渡航を禁じていった。

1612・13年のキリスト教禁教以後、幕府は禁教政策を強化していった。同時に、禁教の徹底と貿易を管理するため海外との関係を制限していった。1616(元和2)年には、中国船(唐船)以外の船の寄港地を長崎と平戸に制限した。イギリスは、オランダとの貿易競争で不振だったこともあり、23年に平戸商館を閉鎖した。さらに24(寛永元)年、幕府はキリスト教布教に積極的であったスペイン船の来航を禁止した。そして、九州各地に來航していた中国船にも、35年に長崎以外での貿易制限を加えた。またキリスト教対策の一環として、日本人とヨーロッパ人との接触を監視するため36年には長崎に出島が建設され、スペインと同じくカトリック国のポルトガル人が収容された。

日本人の海外貿易についても、1633年には、朱印状だけでなく、幕府老中の奉書も必要となった(奉書船貿易)。また、海外でキリスト教徒となった者への警戒から、35年には日本人の海外渡航と帰国を禁じた。36年には日本人と西洋人の間に生まれた人々も追放された。

こうして西日本の大名がそれぞれ行っていた貿易は統制され、彼らの領内でのキリスト教禁制も強まっていった。そのなかで1637年、九州の島原・天草地方にて、天候不順が続くなかで領主から重税を課せられたことから、相次いで一揆が発生した。もともとキリスト教大名が支配していた地域であり、旧家臣やキリスト教徒が多数潜伏していたため、一揆勢はキリスト教で結びつき、約3万人が参加する大規模な一揆となった(島原・天草一揆)。一揆勢は原城跡に籠城し、3か月余り抵抗したが、幕府は15万人以上の軍勢を動員し、ようやく一揆を全滅させた。

項の課題

なぜ、江戸幕府は海外との貿易を統制したのだろうか。

史料 オランダ商館長が1640年ごろ記した日本の姿

日本で行われている貿易は、外国の人々によって担われているのだが、国土が広い割には少ない。それは、この土地が、ほとんどあらゆる産物を自分たちで有しているからである。…(日本に)毎年のように手広く商品を市場にもたらず交易をするのは、第一に中国人である。彼らは日本の国が始まった当初から今日に至るまで行い、スペイン人、ポルトガル人は100年以上行い、イギリス人はそれより遅かった。…最後にオランダ人がやってきて、確たる地位を得て、約40年間貿易を行っている。(『世界史史料12』)

疑問

なぜ最後にやって来たオランダ人が、中国人と同じような確固たる地位を得ることができたのだろうか。

① 外国船制限と欧州情勢

ヨーロッパの戦争が波及し、1620年イギリスとオランダの船が、ポルトガル船を日本近海で襲う事件が頻発し、1621年幕府は外国人による日本人売買や武器輸出、日本近海での武力行使を禁じた。

② 海外の日本人 幕府は5年以内

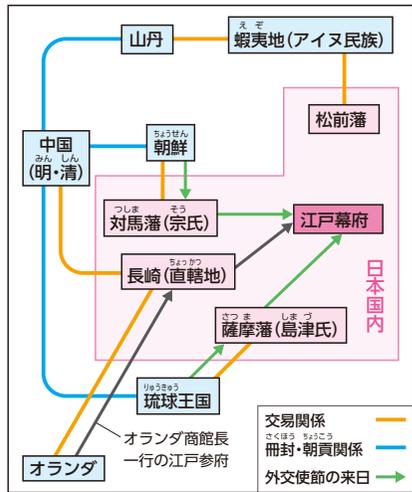
に帰国したものは、海外に戻らない限り罪に問わないとした。それでも各地の日本町(→p.149)に残った人々は、やがて現地人と同化し、日本町も消滅していった。

③ 天草・島原のキリシタン大名

戦国時代に島原は有馬氏が、天草は小西行長などがキリスト教を保護し、多くの領民がキリスト教徒となった。

世界の島原・天草 中の日本 一揆と外国

一揆勢は、出島のポルトガル人は自分たちと同じカトリックなので救援してくれると期待した。しかしポルトガルは、農民の領主への反抗はカトリックの考えに反するとして助けなかった。一方、平戸にいたプロテスタントのオランダは、ポルトガルとライバル関係にあるため、幕府に援軍を申し出て、短期間だが船で原城跡を砲撃した。



↑1 江戸幕府の対外関係 この関係を、「幕府の外交方針」としてみずから認識するようになっていくのは、18世紀末のロシア船来航(→p.197)のころ、外国からの貿易交渉を断り始めてからであった。



↑2 絵踏で踏まれた絵 イエスなどの絵を人々に踏ませ、キリスト教徒でないことを証明させた。(東京国立博物館蔵)

ポルトガル船追放の理由や背景を記述しています。p.148の貿易や禁教令などの学習とつながります。特色①

- 23 イギリス、平戸商館閉鎖
- 24 スペイン船来航を禁止
- 33 奉書船以外の海外渡航禁止
- 34 海外との往来や通商を制限
- 35 日本人の海外渡航・帰国禁止
- 36 中国船の来航を長崎に限定
- 37 ポルトガル人の妻子を追放
- 38 長崎に出島が完成
- 39 →ポルトガル人を収容
- 41 島原・天草一揆(～38)
- 39 ポルトガル船の来航を禁止
- 41 オランダ商館を平戸から出島へ移す

↑3 貿易制限の流れ

史科]寛永十(一六三三)年の禁令  
異国え奉書船の外、舟遣し候儀堅く停止の事。  
異国え渡り住宅これある日本人来り候はば、死罪申し付べく候。但し：五年より内に罷り帰り候ふものは：日本にとり申すべきにつきては御免、併し異国えまた立ち帰るべきにおおては死罪申し付べく候事。(徳川禁令考)

史科]寛永十二(一六三五)年の禁令  
異国え日本の船之を遣すの儀堅く停止の事。  
日本人異国え遣し申間敷候。  
異国え渡り住宅仕り之有る日本人来り候ハバ死罪申付べく候事。(徳川禁令考)

史科]寛永十六(一六三九)年の禁令  
自今以後かれうた。渡海之儀これを停止せられをはんぬ。此上若し差渡二おあては其船を破却し、ならびに乘来る者速に斬罪に処せらるべきの旨、仰せ出さる所也。(徳川禁令考)

① かれた…ここではポルトガル船全般を指す。ポルトガル人が活用していた帆船レウタ・パレオン船の小型版に由来

貿易制限の完成

幕府はポルトガル船を追放し、4つの口における近世の対外関係が完成した。この対外関係の制限は幕末まで変わらないことから、後に「鎖国」と理解された。

幕府は、島原・天草一揆で民衆がキリスト教で強く結びつき、また出島のポルトガル人に援軍を求めようとしていたことを知り、ポルトガル船の来航を危険視した。しかし、日本が輸入していた生糸の多くは、ポルトガル船によって中国のマカオからもたらされていた。幕府は議論の末、1639(寛永16)年に、ポルトガル船を日本から追放し、生糸はオランダ船と中国船から輸入することとした。そして41年、ポルトガル人の去った出島にオランダ商館を置き、オランダ船との交易を直接の監督下に置いた。こうした動きと同時に、幕府は38年にキリスト教を厳禁とする法令を發布し、領主の支配を超えてすべての村や町に高札が建てられた。幕府のなかでも、全国にキリスト教禁教を指示するための宗門改めの組織づくりが始まった。もともとキリスト教徒が多かった九州では、絵踏が定期的に行われる地域が増えていった。

1639年のポルトガル船追放以後、貿易統制は幕末まで続き、日本は4つの場所で海外との交流を行った。長崎ではオランダと中国、対馬では朝鮮、薩摩では琉球王国、松前ではアイヌ民族と関係をもった。これらの場所は「口」ともよばれ、近世は4つの口が日本にあったと言える。この外交のしくみは、幕末以降「鎖国」という言葉で広まった。

17世紀の日本の貿易の中心は、中国やその周辺のアジア諸国から生糸や絹織物を大量に輸入し、銀を中国方面へ輸出することであった。輸入生糸や絹織物は、身分の違いを衣服で示すための高級品として活用され、甲冑などにも使われた。また、漢方の原材料や、砂糖、火薬の原料、高級な香木なども、日本では自給できず、輸入する必要があった。一方で木綿は、初めは従来と同様に主に朝鮮から輸入していたが、17

世界の 明清交替と日本  
16世紀末、中国東北部で女真人(→p.62, 148)が統一され、1636年に国号を清にした。1644年、漢人王朝の明が反乱によって滅び、清は北京に入り中国を支配し始めた。その後も南部や台湾で旧明勢力による清への抵抗が続き、日本人を母にもつ平戸生まれの鄭成功が中心となった。旧明勢力は日本へ援軍を求め、一部の大名や平人は新たな領地を期待し出兵を望んだが、幕府は秀吉の朝鮮出兵(→p.146)の失敗を踏まえ、要請を拒否した。その後、1683年に旧明勢力の反乱も終わった。明の滅亡は日本に衝撃を与え、「華夷変態」(中華が蛮夷に変わった)と表現された。日本では明への同情や鄭成功の人氣が高まり、鄭成功を忠臣として表現した近松門左衛門(→p.186)原作の「国性(姓)爺合戦」が、人形浄瑠璃や歌舞伎として上演され、人氣を博した。



↑4 「国性(姓)爺合戦」の歌舞伎を描いた浮世絵。主人公が「明国」復興のため「鞋」  
明清交替と、それが日本に与えたさまざまな影響が、本文とコラムでわかります。特色①

世紀の早い時期には国産化が進み、輸入は少なくなっていった。

オランダ・中国との長崎貿易

長崎では、オランダ・中国との間で貿易が行われた。輸出入品は共通するものが多いなか、滞在中の待遇は違いがみられた。

5 長崎に来航する外国船は、オランダ船と中国船(唐船)のみとなった。長崎は幕府の直轄都市であり、漂流民の審査や、交渉に訪れる外国船への対応なども行った。長崎での貿易品は、オランダ船も唐船もアジアからの産物が中心であった。

オランダ東インド会社は、バタヴィア(現 ジャカルタ)にアジアの拠点置いており、出島のオランダ商館は支店として機能した。商館長は年に1度江戸で将軍に面会し(江戸参府)、その往来で日本人の学者などと交流した。また、オランダは海外の情報も提供した(オランダ風説書)。

中国船は中国本土の船だけでなく、東南アジアから来航する華僑の船もみられた。中国船の乗組員は、当初は長崎の町中に滞在していた。海外情報は中国船からも提供された。中国では17世紀半ばに明から清へ争いを伴う王朝交替(明清交替)があり、中国船も明・清に勢力が分かれ、日本近海での紛争も起きた。明の人々が日本に退避することもあり、そのなかで明僧の隠元隆琦が黄檗宗を開いた。その後、明清交替が終わり混乱も収まると、貿易のため中国船が長崎に押し寄せた。幕府は対応のため上陸した中国人を長崎内の唐人屋敷に住ませる方針に転換した。

18世紀になると、生糸の国産化が進み、代わって砂糖が大量に輸入された。一方金・銀の産出量が減少したことから、輸出品は銅、俵物・昆布などの海産物が中心となった。

朝鮮・琉球との外交と貿易

朝鮮と琉球は、近世を通じて幕府と正式な外交関係があった。一方で、実際の交流方法や扱いについては違いが大きかった。

貿易のみを行ったオランダ・中国とは異なり、朝鮮・琉球とは、幕府は江戸時代を通じて公式の外交関係をもち続けた。

① 漂流民 海流や台風により、海外へ流された漂流民は、アジアの海が政治的に安定化すると帰国する事例も増えた。彼らは幕府にとって、海外について知る貴重な情報源であった(→p.197)。

② オランダ視点の出島貿易 オランダは、アジアの商品の購入資金として、日本の銀や金を必要とした。日本側が長崎を警備するため、出島のオランダ商館員は10名程度と、他所のオランダ商館と比べて少なかったが、17世紀は最も利益を出す商館だった。

③ オランダ風説書 幕府の求めで、当初はカトリック勢力の動静が、やがて海外情報全般が伝えられた(→p.205)。幕府は唐人や漂流民からの情報と比較した。

④ 黄檗宗 臨済宗と教えが近い禅宗の一つ。臨済宗などが日本風に変化していたのに対し、中国の禅の特徴を強く前に出している。隠元隆琦が、来日していた別の明僧に招聘され、確立した。

⑤ 俵物 いりこ・ふかひれ・干しあわびのこと。俵に入れて乾燥させて運ぶためこうよばれた。中国で高級食材として重宝された。



↑2 アイヌオムシャ アイヌ民族を支配するため行われた年中行事。各地の会所に周辺のアイヌが集められ、品物の下賜や宴会が行われた。(函館市中央図書館蔵)

↑1 朝鮮通信使 朝鮮使節は、第3回までは回答兼刷還使、第4回からが朝鮮通信使とよばれ、全12回来日した。最大500人規模で来日し、日本側は沿道の整備や各地での接待に膨大な費用がかかった。(林原美術館蔵)

① 倭館 対馬藩から武士や商人が500人程度派遣された。外交交渉を行う区画と、日本人が住み神社・商店なども設けられた居住区に分かれていた。

朝鮮・琉球王国との貿易品や、アイヌ民族との交易品を記述しており、近世の対外関係の具体的な様相がわかります。特色②

↑3 琉球使節 琉球使節は2種類あり、琉球国王の代替わりに送った使節を謝恩使、幕府将軍の代替わりに送った使節を慶賀使という。(国立公文書館蔵)

② 琉球国王と清 琉球国王の代替わりの際には、清朝皇帝の使節派遣を受け、国王に任命される必要があった。

③ 幕府の蝦夷地認識 幕府は蝦夷地を、外国に準ずる地域(異域)だと考えていた。

④ アイヌ民族の変化 この時期のアイヌ社会には、シャクシャインのような指導者に率いられた政治的まとまりが各地に形成されていた。

2項の振り返り  
学習内容を踏まえ、p.165の2項の課題に答えよう。

朝鮮とは、対馬藩を通じて関係をもった。対馬藩は1609年に朝鮮と己酉約条を結び、釜山に居留地として倭館を設置して朝鮮との外交業務や貿易にあたった。朝鮮国王と将軍の間では、外交文書も交わされた。

朝鮮通信使は、幕府将軍の代替わりごとに来日した。日本国内を通行する使節を人々は見物し、儒学者など文化人どうしの交流も行われた。

琉球王国は独立国であったが、1609(慶長14)年に薩摩藩の侵攻を受けた。その結果、琉球王国は奄美群島を薩摩藩に割譲し、また国内に薩摩藩の武士が常駐して国政を監督されるようになった。薩摩に年貢を上納する義務もつくられた。琉球は、琉球国王と幕府将軍の代替わりに使節を日本に送り(謝恩使・慶賀使)、琉球国王と幕府老中との間で公式の外交文書が交わされた。一方で薩摩は、琉球王国を公式には、中国を宗主国とする独立国として存在させ続けた。琉球は毎年のように中国へ船を派遣し、そこから中国の産物もたらされた。

朝鮮・琉球ともに、貿易品の多くは長崎貿易と共通していた。一方で、朝鮮からは、米や木綿といった生活必需品も輸入された。また琉球からは、17世紀前半から黒糖が輸入され続けた。

### 蝦夷地でのアイヌの人々との交易

蝦夷地のアイヌ民族とは、松前藩を通じて交易が行われた。時代が下るにつれ、アイヌ民族は経済的に従属させられていった。

蝦夷地では、道南の松前藩がアイヌ民族と交易した。松前藩は幕府より、アイヌ民族との交易の独占を認められ、藩主の松前氏は家臣に交易の権利を分与した(商場知行制)。交易では米・衣服と昆布・サケなど北方の産物が交換された。また、アイヌ民族も樺太を通じて中国とのつながりがあったため、中国の織物(蝦夷錦)もたらされることもあった。

交換比率はしだいに日本有利となっていたため、アイヌ民族の一部は1669年にシャクシャインを中心に戦いを起こした(シャクシャインの戦い)。これは鎮圧され、以後経済的に取奪が強化された。後に取引は商人に委託(場所請負制)され、さらに経済的従属は強まった。



←1 琉球国王の肖像画 この肖像画は、沖縄戦(→p.315)の際に海外へ流出し、2024年にアメリカから返還された。(沖縄県教育委員会提供)



↑2 ノロ 琉球王府から任命され、多くが世襲された。(部分 東京国立博物館蔵)

←16~17世紀編纂の、祭司で謡われたオモロを集めた歌謡集。伊波普猷が研究した(→p.284)。



琉球王国の文化とともに、周辺地域との関係や相互的な影響についても記述しています。近代以降の琉球王国の歴史や、現在の沖縄の文化とのつながりもわかります。特色③

【史】 おもろさうし 地天鳴響心大主 なるやせぞ 知らたる せざや 遣り 大和島 治め (97歌 部分) 【訳】 国王は ニライカナイの 霊力をもって知られている その霊力を遣わして 大和の島を平定せよ

## 深める 琉球王国の文化と周辺世界

### ● 琉球王国の信仰

日本とは別の国であった琉球王国では独自の信仰が発達した。沖縄の人々は海のかなたにニライカナイという他界があり、そこからやって来る神によって村落に豊穡がもたらされると信じていた。村落の祭祀はノロとよばれる女性がつかさどった。これらは沖縄県内だけでなく、鹿児島県の奄美群島でも確認される。奄美群島は、薩摩藩の島津氏の侵攻を受けるまで、琉球王国の支配下にあったためである。

### ● 琉球王国の文字・言葉・歌

琉球の人々は独自の文字はもたず、漢字やひらがなを用いた。琉球王国の公文書や碑文、歌謡集の『おもろさうし』をみると、ひらがながよく使われていたことがわかる。琉球の言葉(琉球語)を表記するにはひらがなが便利だったようである。その一方で、16世紀後半に琉球が島津氏に使者を派遣した際、日本出身の人物が通訳として同行していた。当時の琉球の人々と日本の人々との間の言葉の壁は、高かったようである。

### ● 日本・中国の影響を受ける琉球文化

1609(慶長14)年に薩摩の支配下に入った琉球ではさまざまな変化がみられた。17世紀後半には家譜(系図)が編集され、家譜をもつ士族ともたない百姓という身分の区別が明確になった。士族と百姓では衣服やかんざしに差があったほか、住宅の広さや屋根に瓦を用いてよいかなどにも違いがみられた。

薩摩に服属しながら中国への朝貢を続ける近世の琉球では、日本・中国の双方の影響を受けながら独自の文化も展開した。琉球の士族たちは薩摩や江戸に赴いたり、那覇に滞在している薩摩藩士と交流したりする機会があった。そうしたときのために、和歌や立花といった日本の文化を教養として身につける人々もいた。また、中国から来た使者をもてなすために創始された琉球独自の芸能である組踊には、能や狂言の影響もみられる。中世の琉球では公文書にひらがなが多用されていたが、近世には公文書は漢字で記されるようになる。これも公文書に主に漢字を用いる日本の影響を受けた変化であろう。

一方、近世の琉球では、儒教思想の重視や風水思想の導入など、中国の学問の影響も大きかった。亀の甲羅のような形の亀甲墓や魔除けの石造物である石敢當なども、中国の影響を受けたものである。

琉球の詩歌である琉歌は、八八八六の三十音でよまれることが多い。表現や技法に和歌からの影響もみられるが、琉球語を用いて南西諸島の風土がいきいきとよまれ、琉球ならではの歌となっている。

琉球王国が栄えた島々は、近現代、日本への編入やアメリカの統治と返還など、治世が移り変わっていく。それでも現在の沖縄県では、琉球王国の言葉がウチナーグチ(沖縄語)に残り、琉歌のコンクールや劇場での組踊上演が行われている。琉球王国の文化は、現在も愛好されているのである。



（東京国立博物館蔵）

2 アットウシ  
丈夫で防水性に優れたので、和人向けにも生産され、北前船の船乗りなどに愛好された。

1 和人が描いた近世のアイヌ民族の男性  
狩猟には弓矢を使い、罾や矢毒なども活用した。また獲物を追い込むために犬を連れていた。（函館市中央図書館蔵）



アイヌ民族の文化とともに、周辺地域との関係や相互的な影響についても記述しています。その他の北方民族の概要や、近代以降の北海道の歴史とのつながりもわかります。 特色③

## 深める アイヌ民族の文化と周辺世界

### ●アイヌ民族とその生活

アイヌ民族は、日本やロシアの領土に組み込まれる以前から、北海道、サハリン(樺太)南部、千島列島、本州東北北部の一部に居住してきた「先住民族」である。「アイヌ」は本来アイヌ語で「人間」を意味する。アイヌ民族は広い地域に住むため、「アイヌ文化」といっても、地域性・多様性がある。

近世のアイヌ民族は、狩猟・漁業・採集のほか雑穀農耕も行ったが、サケとシカは主食に近い別格の存在とされた。住居はチセといい、萱ぶきや笹ぶきでつくられた。チセの中央の囲炉裏は、鉄鍋で煮炊きを行うほか、火の神が崇拝されたことからさまざまな儀式の中心になった。儀式や生活で重要な鉄器や漆器は、和人などとの交易で入手し、その一部はチセに宝物として置かれた。衣服では、オヒョウの木の皮を加工して織った布(アットウシ)が著名で、さらに木綿や絹の布や衣服を交易で入手し、多彩な装飾を施して、独自の衣服文化を発達させた。

### ●アイヌ民族の言語と文化

アイヌ語は、日本語とは言語学的に別系統の言語であり、地域によってさまざまな方言がある。近代まで文字をもたず、口承によって知識や記憶を継承した。口承文芸は、神謡(カムイユカラ)のほか、英雄叙事詩や散文説話など多様なジャンルがある。

伝統的なアイヌ文化では、動植物やモノ、自然現象など森羅万象のすべてに「魂」(ラムツ)が宿っていると考え、そのなかでも重要な事物は「カムイ」(「神」とされる。魂・カムイこそ本体であり、目に

見える事物は、魂やカムイが現世で一時的に仮装した姿にすぎない。生活のなかで、さまざまな儀礼によって、魂やカムイへの感謝や畏敬が表現された。なかでもクマの魂をあの世へ送り帰す「クマ送り」(イオマンテ)は重要な儀礼として知られる。

### ●アイヌ民族と周辺世界

アイヌ民族は、古くから日本と交易してさまざまな製品を入手し、それらに独自の意味づけをして受容してきた。同時に、北方世界とも濃密なつながりを有し、特に、サハリンのニブフ、ウイльтаやアムール川下流域のウリチ、ナーナイなどの諸民族との関係は深く、文化の類似性もみられる。

中国王朝とも古くから関係をもった。元代には、アイヌ民族の北方進出をきっかけに、元とアイヌ民族が戦った。明代にはアイヌ民族の一部も明に朝貢して交易した。また15世紀半ばに遊牧民の攻撃で明が混乱すると、アイヌ民族と和人の交易が和人優位となり、コシャマインの戦いにつながった。清代には、清とウリチなどの毛皮貿易が盛んになるなか、樺太アイヌも交易に参加し、一部は朝貢も行った。

一方、千島列島にはロシアが南下し、千島アイヌにはキリスト教(ロシア正教)が広まった。

近代に北海道が日本の国家領域に編入されると、アイヌ民族はかつての生活や文化を否定され、厳しい同化政策や差別にさらされた。長い苦難の時代を経て、今日では、言語・文化の復興や権利回復へのさまざまな取り組みが進んでおり、現代文化としての新たなアイヌ文化の創造も盛んとなっている。



1 村の風景 百姓は村に集住しているが、家は個別にある。協働して田植えを行う様子などが描かれている。 QR探Q資料



2 町の風景 江戸の日本橋周辺の様子。店舗、露天売、移動販売(棒手振)など多様な商人が描かれている。 QR探Q資料

疑問 村と町の風景や人々の暮らしには、どのような違いがみられるだろうか。

1 [文]「四季耕作図」(部分) 京都国立博物館蔵、  
2 [歴代勝覧」(部分) ベルリン国立アジア美術館蔵)

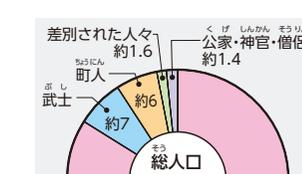
## 3項 身分制と人々の暮らし

項の課題 近世の各身分の暮らしは、どの程度異なっていたのだろうか。

### 近世の諸身分

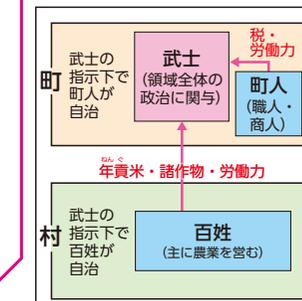
近世の人々は、集団に属することによって社会的に活動することができた。集団に由来する身分ごとに、居住や活動する場所も指定されていた。

- 5 近世は、身分制が社会のしくみの根幹であった。人々は職業や地域に基づいて社会集団に所属した。そして社会集団は、幕府や藩によって身分として認定され、編成された。支配身分の武士や、被支配身分である百姓や町人が基本的な身分であり、それ以外にも公家・宗教者・被差別身分などの多様な身分があった。身分ごとに、居住する場所と職業は決まっており、人々は身分に応じた労働(役)を負担した。



身分制の丁寧な説明や、各身分の関係性に関する記述により、近世の身分制を深く理解できます。 特色②

### ↑3 江戸時代の身分別人口構成



### ↑4 江戸時代の村と町の構造

支配身分の武士は、原則主君の居城のある城下町に集住し、政治・行政と軍事を独占して、法に基づく統治を行った。彼らは苗字・帯刀・切捨御免などの特権をもった。武士どうしは、将軍を頂点とした重層的な主従関係で結ばれ、大名や旗本・御家人、藩士、さらに下級武士からなつた。それぞれが主君に対して、軍役と統治に関する労働を提供した。武士の収入の中心は、領地の村から納入される年貢米であり、石高で収入と家格が示された。そのため武士にとって、年貢米を受けとれるよう、百姓が安定的に農業を営めるようにすることが重要であった。

被支配身分のうち百姓は、村に住んで農業・漁業・林業に従事し、年貢や作物を納め、さまざまな労働を負担した。町人は商人や職人からなり、主に町に住み、町を維持するための税や労働を負担した。特に職人は、大工のように技能に応じた技術労働を提供する場合もあった。

医師や儒学者などの知識人、僧侶や神職・修験者などの宗教者や、芸能者など、基本的な身分には収まらない職能集団も存在した。天皇・公家・一部の上層の僧侶や神職は、領地を与えられ、支配階級とされた。

1 「士農工商」 儒学者らは、身分を古代中国の言葉を使い「士農工商」と表現した。「士」が支配身分のため「農工商」にも上下関係があるようにみえるが、社会の構成と異なる。

2 苗字・帯刀・切捨御免  
公式の場で苗字を名乗る権利、刀を2本さす権利、庶民が無礼を働いた場合などに相手を切っても処罰されない権利。

**史料** 一六四三年に代官へ出された指示  
**田畑永代売買の禁止令**  
 一 身上能百姓は田地を買取、亦身に成る者は田畑法却せしめ、成るべからざるの間、向後田畑るべき事、  
 一 生活などに関する禁令  
 一 百姓の衣類此以前より御法度屋は妻子共絹・紬布・木綿、脇木綿ばかり之を着す可し、此外帯等にもいたし申すまじき事、  
 一 百姓の食物常々雑穀を用べし、八木(米)は狼に食はざる様に申し聞かすべき事。  
 一 在々所々にて、饅頭・切麦・蕎麦切・饅頭・豆腐以下、五穀の費に成候間、商売無用の事、  
 一 五穀の費に成候間、たほこの儀、当年より本田畑新田畠共、一切つくる間舗事、  
 (御触書寫保集成)



↑1 村の構造 入会地からは、肥料である刈藪・草木灰の原料や、燃料となる薪が得られた。

① 農民の自立化 近世初期は、有力な本百姓に隷属する名子・被官などの下人が多数いる村もあったが、17世紀を通じて農民が自立していった。

② 百姓の暮らし 百姓の生活は質素で、主食は雑穀を混ぜた食事がほとんどであり、着物も町から流通してくる古着が中心であった。

③ 年貢の算定 年貢の算定は、毎年武士が作物の収穫高を確認して定める検見法と、一定年限、平均的な収穫高を基準に課す定免法があった。近世前期では検見法が一般的であった。

④ 分地制限令 農民の経営規模が細分化すると年貢や夫役が負担できなくなるため、基準以下の土地の分割相続を禁止した法令。17世紀半ばになると人口が増え分家が多くなってきたため制定された。

⑤ 村内の自治 軽犯罪などは村内で解決が図られ、掟を守らないと村八分のような制裁を科された。また、百姓は本家分家の関係や、結・もやいという互助組織をつくり農繁期や家の修繕などを共同で行った。

**村と百姓**  
 近世の村は、本百姓を中心にして運営され、自治的に運営された生活共同体としての側面と、領主からの支配の単位としての二つの側面をもっていた。

近世の村の構成員は、百姓と一部の職人や僧侶・神職などであった。惣村の分割や、中世末から本格化する新田開発により新たな村が生まれ、18世紀初頭には6万余りの村が全国にあった。一つの村の石高は平均400から500ほどで、400人ほどの住人がいた。

百姓は人口の85%近くを占め、社会や産業の主な担い手であった。17世紀半ばには、1町歩前後の田畑と家屋敷をもち、夫婦と子供、場合によってはその祖父母からなる、単婚小家族型の**本百姓**が村の中心となった。一方で村には、地主の土地を小作や日用(日雇)で生活する**水呑百姓**が存在することもあった。また、漁業や林業に携わる人々も百姓であるため、米に換算して石高で示された村の生産力と、実際の村人の多様な生業の間に、違いがある村もあった。

本百姓には、百姓役といわれる諸役が課せられた。田畑や家屋に課される**本年貢(本途物成)**が中心で、収穫高の40~50%が米穀や貨幣で納められた。そのほか、山林河海の産物や用益に課された**小物成**などもあった。また、戦争時の物資輸送を担う陣夫役、近隣宿場への助郷役、築城や河川の治水、また朝鮮・琉球使節の往来時に国単位に課された**国役**など、**夫役**という労働力提供も課された。夫役は後に、代金を貨幣で支払うことも多くなった。一方領主には、年貢確保のため村の持続的安定性が必要であった。幕府は百姓が零細化しないよう、1643(寛永20)年の**田畑永代売買の禁止令**や、1673(延宝元)年の**分地制限令**などを定めた。

村は本百姓によって自治的に運営された。**村法(村掟)**が決められ、村どうしの争いも話し合いでの解決が目指された。村は支配単位でもあり、生活共同体でもあった。幕府や藩は村に自治を任せつつ、本百姓から**名主(庄屋・肝煎など)・組頭・百姓代の村方三役**という村役人を任命し、



↑2 城下町の構造(姫路の例)

村民を**五人組**に編成し支配した。さまざまな負担は村単位に割り当てられ、村役人を中心に村の責任で応じた(**村請制**)。このように村を運営するため、百姓にも読み書きや計算などの学問が必要となった。

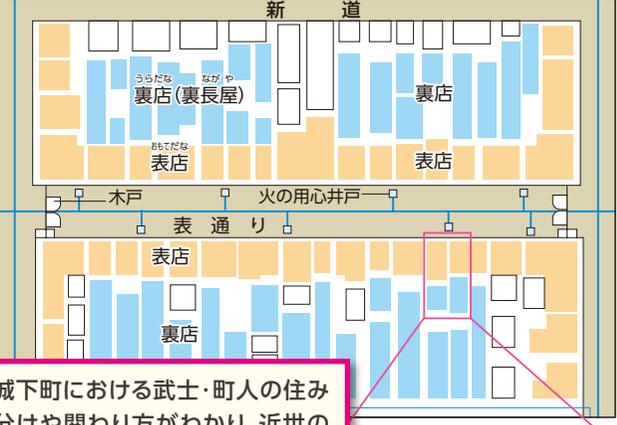
村の領域には、百姓の屋敷と田畑以外に、農業や生活に必要な資源を手に入れるために近隣の村も含めて共同で利用する野山も含まれていた(入会地)。また川などの水も、一つの村を越えて共同で利用した。

**町と町人**  
 近世にはさまざまな性格の都市があったが、それを構成する町は村と同じように町人たちによって自治的に運営されつつ、領主からの負担に応じていた。

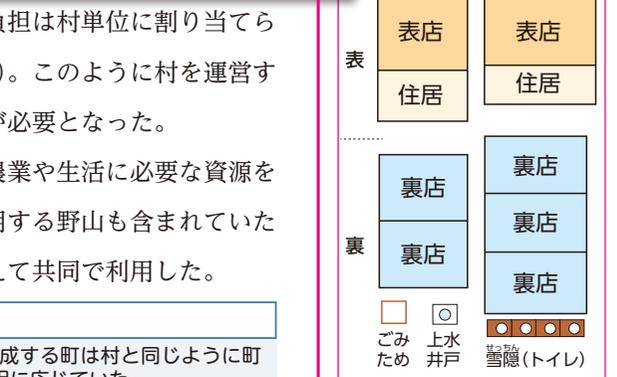
近世には、経済の発展や人の往来の活発化によって、武士が集住する城下町だけでなく、港町・宿場町・門前町・鉾山町などさまざまな性格をもった町が日本各地に形成された。

城下町は、城を中心に家臣の屋敷や行政機構が並び(**武家地**)、面積の大半を占めていた。その周りには商人や職人が住む**町人地**が置かれた。彼らは両替町や大工町のように同業者で集まり、武士の需要に応じさまざまなものを製造したり城下町の外部から調達したりした。また、町には**寺社地**もあり、周縁部に防衛目的で配されることも多かった。

さまざまな町にある町人地には、**町**という単位で、町人の生活と職業のための共同体が存在した。町は共同の生活空間として道を挟んだ家々からなる**両側町**が一般的であった。構成員は、自身の町屋敷をもち商工業を営む地主・家持、土地を借り家を建てる地借、町屋敷を借りる店借、商工業者の奉公人、通りに面さない裏店に居住する振売(行商)や日用(日雇)など、重層的であった。このうち地主・家主のみが本来の町人であり、**町法(町掟)**を定め、町の自治に参加した。幕府や藩は、町に町名主や町年寄など町役人を置き、また町人を五人組に編成して支配した。町人の負担は、道路・堀・上下水道の整備や清掃、消防の経費負担など百姓より軽かった。商工業者には**運上・冥加**などの税が課せられた。



↑3 町の構造 裏店の1区画で1家族が暮らし、6畳または4.5畳の居間と、炊事などを土間のみからなるため、家財などは少なかった。



↑3 町の構造 裏店の1区画で1家族が暮らし、6畳または4.5畳の居間と、炊事などを土間のみからなるため、家財などは少なかった。

⑥ 城下町の土地比率 例えば、江戸の町は、武家地約70%、寺社地15%、町人地15%の面積であったが、武家地と町人地の人口はほぼ同じであった。

⑦ 町人の暮らし 町人は百姓と比べて税全体の負担が少なく、夫役も都市では日用を雇用して代替できた。食生活や娯楽も豊かだったが、災害や飢饉の際はぜい弱だった。

⑧ 運上・冥加 商工業者の金銭的負担。冥加は、商業などの仲間で営業の独占や特権を認可される代わりに一時的に収めた。運上は商工業行為に対する営業税として常に負担した。

## 歴史再考! 江戸時代の身分は定まったものだったのか

身分制が厳格だと社会が硬直するため、17世紀末頃から一部で身分の移動がみられた。北方探検で活躍した間宮林蔵(→p.197)が、学識があり算術に優れていたことを認められ、百姓から幕臣になったように、武士に登用される者がいた。裕福な百姓・町人などが、困窮した武士の家に持参金を払って名目上養子となり、身分を変えることもあった。作家として成功した曲亭馬琴(→p.202)は、孫を武家の養子とした。また、学問を修め医師や宗教者となることも、身分を超越する手段であった。その他、百姓が下級武士や宗教者の仕事も行い、1人で二つの名前と身分を使い分けることもあった。下級武士として働く場合、勤務時間のみ苗字と帯刀が許され、勤務中は他者からも武士として扱われた。

### ➔ 曲亭馬琴の生涯

年	主な出来事
1767	江戸で、旗本に仕える滝沢家に生まれる
76	父との死別・兄との離別などで家督を継ぐ
80	主君の下から出奔、その後主君を変えつつ俳諧(→p.186)や医術などを学ぶ
92	薦屋重三郎(→p.199)に見込まれ雇われる その際改名して武士の名と身分を放棄
96	文章執筆に専念し、初めて読本を刊行
1814	『南総里見八犬伝』(→p.202)の刊行開始
36	蔵書売却などで資金をつくり、孫を御家人の養子とする(実質的な武士身分購入)

**考えよう** 身分はどの程度定まっていたのか、あなたの考えを述べてみよう。

近世の「家」と女性の立場に関する記述で、近世社会への理解が深まります。「家」と女性については、近代以降でも丁寧に取り上げています(p.253など)。 **特色③**

① 差別意識の定着 牛馬解体や皮革加工など死のケガレに触れることが多い仕事に従事して、死牛馬処理の役を負う集団や、また治安を守るための下級官吏の役を負う集団が、差別対象として強く意識されるようになった。ただし、被差別民の職業、法的立場、呼称は地域によって多様だった。

## 差別された人々

近世社会に存在するさまざまな集団のなかには、えた・非人といった、社会的に差別される人々がいた。

近世のさまざまな集団のなかで、えた(かわた・長吏)・非人とよばれる人々は、他の人々から差別された。差別される人々は中世から存在していたが、17世紀の終わり以降に朱子学が広まると、民衆も含め社会全体で差別意識が定着し、えたは村で、農業とともに死牛馬の解体やその皮革の加工などを営み、幕府や藩は皮革の上納や、牢番・行刑役を勤めさせた。非人は飢饉や刑罰によって基本的な身分から外れた者で、乞食や芸能などで生活し、幕府や藩は行刑役や番人などを勤めさせた。えた・非人は、居住地や衣服・婚姻・葬送など生活全般で差別を受けた。

## 近世の「家」社会

近世社会の人々は、家に属することで社会的に存在することができた。家長の権限は強まりつつも、家の存続のために養子なども盛んであった。

近世社会に存在したさまざまな集団は、個人の集合体ではなく、多くの「家」によって構成されていた。17世紀半ば、社会が安定すると、百姓や町人も含めて社会全体で家の枠組みが安定していった。

家の単位が、構成員である各人の、家屋・土地・墓地などの財産、職業を維持するための道具の保持を含めた技能の継承を保障していた。そのため家の存続は、人々が社会的に生きるために重要であった。家長の男性やそれを継ぐ予定の長男の権限は強くなっていき、一方で女性は公式に家を継承することができないとされ、下の立場に置かれた。

家において、血縁関係は必ずしも重要ではなく、存続するために婿養子や次の世代に他家から夫婦ごと養子にするなどの方策もとられた。近世後半になると、これは身分を越える手段ともなっていた。

## 「家」における女性の立場

### 人権・ジェンダー

近世の女性は、家庭や寺子屋で学ぶ「女大学」(→p.158)などの書物を通じて、女性は結婚するまで父に、結婚後は夫に、夫の死後は子供に従うべきだという「三従」の心得を学んだ。

一方で大坂の商家では、「息子は選べないが婿は選べる」という言葉に象徴されるように、女子が優秀な婿養子を迎えて家業を繁栄させることが望ましいと考えられた。このように、女性が実質的に財産の継承者である事例もある。

## 3項の振り返り

学習内容を踏まえ、p.171の3項の課題に答えよう。

### 演習問題



## 1節の振り返り

江戸幕府は、全国の支配体制をどのように整備したのだろうか。あなたの考えを説明しよう。また、あなたが2章で表現した「近世の特色の仮説」も再確認しよう。